

多賀城市文化財調査報告書第100集

山王遺跡

－第66・68次発掘調査報告書－

平成22年3月

多賀城市教育委員会

序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの遺跡は、本市の歴史が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきたことを物語っております。まさに史都にふさわしいこれら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務のひとつであります。このため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、本書は山王地区公民館体育館建設に伴い実施した山王遺跡第66・68次調査の成果を記録したものです。本調査では、古墳時代の堅穴住居跡や平安時代の道路跡などを発見し、多賀城市の歴史を解明するうえで貴重な資料を提供しました。

この報告書が、市民の皆様をはじめとして広く活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地域住民の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成22年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊地 昭吾

例　　言

- 1 本書は、平成20・21年度に市単独事業として実施した山王遺跡第66・68次調査の調査成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、第1次調査からの連続番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系 X」を用いている。
- 4 挿図中の高さは標高値を示している。
- 5 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原:1996)を参考にした。
- 6 本書の執筆、編集は、相澤清利が行った。漆紙文書の解説は平川南氏(国立歴史民俗博物館)、武井紀子氏(東京大学大学院)に依頼し、鈴木琢郎との連名で附章2として収録した。遺物の写真撮影は鈴木が担当した。
- 7 本書の作成に関しては、次の方々からご指導・ご協力を賜った(敬称略)。
青山博樹(福島県文化振興事業団)、柳澤和明(東北歴史博物館)、辻秀人(東北学院大学)、芳賀英実(石巻市役所)、長島榮一(仙台市教育委員会)、尾野善裕(京都国立博物館)
- 8 本調査については、現地説明会資料、宮城県遺跡調査成果発表会資料等で一部内容を公表しているが、これらと本報告書で記載内容が異なる場合には本報告書の内容がそれらに優先するものである。
- 9 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

調査要項

- 1 調査名 山王遺跡第66・68次調査
- 2 所在地 多賀城市山王字毛上28
- 3 調査期間 平成20年10月29日～平成20年12月21日(第66次)
平成21年3月5日～平成21年3月31日(第66次)
平成21年4月7日～平成21年7月6日(第68次)
- 4 調査面積 700m²
- 5 調査主体 多賀城市教育委員会教育長 菊地 昭吾
- 6 調査担当 多賀城市教育委員会文化財課長 佐藤 慶輝(平成20年度)
高倉 敏明(平成21年度)
- 7 調査担当者 多賀城市教育委員会文化財課調査普及係副主幹 武田 健市
主査 相澤 清利
発掘調査員 四家 礼乃
鈴木 琢郎
山田 しょう
- 8 調査協力者 多賀城市役所総務部管財課施設経営係 山王地区公民館 多賀城市立第二中学校
- 9 調査従事者 赤間かつ子 阿部信夫 速藤好巳 大江かおり 大竹一恵 大竹利吉 大場孝也
小野玉乃 官野清仁 工藤博文 小松まり 今野晃子 今野和子 佐藤正 佐藤十五 咲井一征 清水亮 鈴木政義 鈴木裕子 武島好 戸枝瑞恵 中村敏雄 七海孝 南城美岐子 橋沼茂二 藤田恵子 星彰 渡辺ゆき子 後藤哲生 坂井健次郎 佐藤一郎 佐藤尤彦 菅原みづ枝 鈴木義弘 高橋磨 田村勝征 千葉志津子 虎井優子平山節子 鈴木三男 平間大志 藤原庄一 和田富夫 鈴木幸夫 若生要一 三浦 侑士 立花英明 井口幸男 佐藤光夫 斎藤隆行 鈴木季雄 岸柳あきら 加藤義宏 南里さち子 中村匠 片倉知恵子 佐藤千鶴子 昆野ひろみ 熊谷由紀 成瀬正賢 山田康太郎
- 10 整理従事者 丑田明希 小野寺佳枝 高橋由里子 斎山未津留 菅野良子 橋本和暉 右地和美 伊藤美代子 松橋純子

目 次

| | |
|------------------------------|----|
| I 遺跡の立地と概要 | 1 |
| II 調査に至る経緯と経過 | 3 |
| III 調査成果 | 4 |
| IV 考察 | 51 |
| V まとめ | 57 |
| 附章1 多賀城市山王遺跡第68次調査における自然科学分析 | 59 |
| 附章2 山王遺跡第66次調査出土の漆紙文書 | 一 |

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
SI: 積穴住居 SB: 建物 SA: 柱列 SD: 溝 SK: 土壙 Pit (P): 柱穴及び小穴
SX: その他の遺構
- 2 層序の表記については、一つの層を細分する際に上下関係が把握できたものについては算用数字を枝番号として用いた。
- 3 奈良・平安時代の土器の分類記号は以下の通りである。
 - (1) 土師器杯
 - A類: ロクロ調整を行わないもの
 - B類: ロクロ調整を行ったもの
 - B I類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - B II類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - B III類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - B IV類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - B V類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - (2) 土師器壺
 - A類: ロクロ調整を行わないもの
 - B類: ロクロ調整を行ったもの
 - (3) 須恵器杯
 - I類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - II類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - III類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - IV類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - V類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する。
- 4 瓦の分類は『多賀城跡 政府跡 図録編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、『多賀城跡 政府跡 本文編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)に従った。
- 5 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年(934)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える見解と(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究年報1997』 1998)、『扶桑略記』延喜15年(915)7月13日条にみえる「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」「日本第四紀地図」1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」「中川久夫教授退官記念地質学論文集」1991)。当市では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の立地と概要

山王遺跡は、宮城県多賀城市南宮・山王に所在し、七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上（標高4m～5m前後）に立地している。遺跡内の地形はおおむね平坦で地形的変化に乏しいが、中央付近を東西に延びる県道泉塙釜線沿いが高く標高4.5～6.5mとなっている。また、周辺一帯は泥炭層が厚く堆積する後背湿地などが複雑に入り組んで分布しており、この地域が複雑な微地形の変遷を経てきていることが明らかになっている。その範囲は東西約2km、南北約1kmの範囲に広がっており、東側の市川橋遺跡、西側の新田遺跡とともに大規模な遺跡群を構成している。

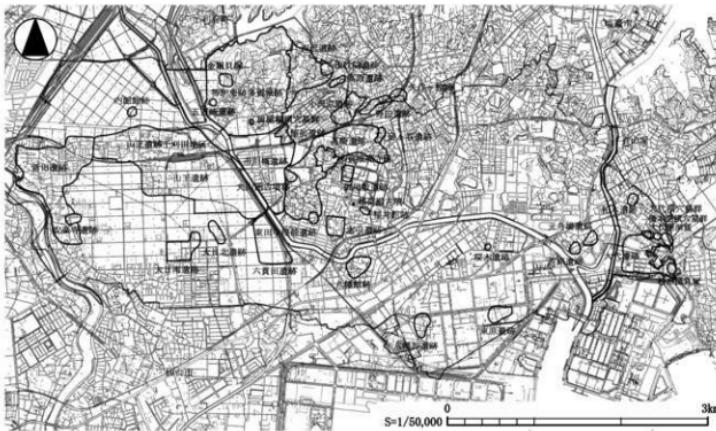
本遺跡では、これまで数多くの調査が行われ、弥生時代中期中葉の水田跡・遺物包含層、古墳時代の集落跡・水田跡、奈良・平安時代のまち並み、中世の留守氏に関わる屋敷跡、近世の堀跡、墓跡などが発見されている。

弥生時代：中期中葉ごろの土層が現地表下3～4m、標高10～15mの深さで確認されており、八幡、水上、南宮地区の東西900m、南北200mの範囲に及んでいる。この土壤には土器、石器等を含んでいたり、水田として利用されているので、周辺に集落の存在が想定されている。

古墳時代：前期では遺跡中央部の町地区で竪穴住居跡、方形周溝墓、北東部の八幡地区や西側の掃下し



第1図 多賀城市の位置



第2図 多賀城市内の遺跡

地区から南側の多賀前地区にかけて広範囲に水田跡が発見されている。該期の集落については、堅穴住居跡の発見例がごくわずかで具体的な様相はいまだ明らかになっていない。中期になると微高地上に多数の堅穴住居跡が発見され、集落が形成されていたことが明らかとなっている。八幡地区では前半階には鍛冶工房が出現し、遺物包含層からは多量の土師器のほか、鹿角製刀器具や琴柱形角製品、卜骨など特殊な遺物も多く出土している。東町浦地区では大規模な区画溝や堰が発見され、西町浦地区では続縄文土器や黒曜石製の石器が出土するなど、地域の拠点的な集落であった可能性が考えられる。後期になると、八幡地区で100軒を超す堅穴住居跡が発見されている。重複するものが多数認められることから、集落が長期間にわたって営まれていたと考えられている。また、集落内を流れていた河川跡からは、多量の土器のほかに柄香炉、卜骨、肅串が出土しており、本地区周辺における仏教文化の受容やト骨を用いた祭祀を知る上で貴重な資料といえる。この時期の集落は、中央政権や北方文化圏とのつながりを持つ有力集団による拠点的な大集落であったとみられている。

奈良・平安時代：奈良時代では、八幡地区で掘立柱建物跡や堅穴住居跡、区画溝跡、材木塙跡が発見されている。しかし、遺構の密度としては、後述する平安時代に比べれば極めて散在的であり、未だこの時期の様相については不明な点が多い。なお、発見された溝跡からは漆紙文書や漆付着土器が多数出土しており、周辺に漆工房の存在が想定されている。平安時代になると城外の方格地割が完成し、地方都市としての景観を見せるようになる。西端部を除く本遺跡内のほとんどがこの地割りに組み込まれ、各地区で道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡などが多数発見されている。これまでの成果によると、外郭南辺築地に平行する東西大路沿いには「国守館」をはじめとする国司クラスの邸宅が立ち並び、それより離れた区画には下級役人の住まいや漆・鍛冶に関わる工房が設けられるなど、区画内で土地の選定が行われていたことが明らかになっている。さらに地割り外の低湿地は生産域（水田・畑）となっており、一部墓地として利用された



第3図 方格地割と調査区の位置

ところもある。また、東町浦地区の土壌から多数の灯明皿が出土しており、この周辺で「万燈会」のような仏教行事が行われていたと推測される。

中世：八幡・伏石・中山王地区において大規模な溝に区画された屋敷跡が発見されている。このうち八幡・伏石地区では、12～13世紀頃の「古い屋敷跡」と15～16世紀頃の「新しい屋敷跡」が発見されており、「新しい屋敷跡」については、新田遺跡と同様な屋敷群の一部であると考えられている。これら屋敷の居住者については、本遺跡一帯が守氏の支配する「高用名」及び「南宮庄」に比定されている地域であることから、それに関連した武士層であったと推測される。

近世：塩竈街道を踏襲しているとされる県道泉塩釜線に面した西町浦・町・伊勢各地区で、近世の掘立柱建物跡や区画溝跡、井戸跡などが発見されている。このうち西町浦地区では、かつて酒造業を営み塩竈一の宮の「御神酒屋」であった賀川家の敷地内を調査している。大規模な東西・南北の堀跡と井戸跡が発見され、堀跡からは陶器や土器・木製品・石製品が多量に出土している。また、町・伊勢地区でも堀で区画された南北に長い屋敷跡が発見され、多数の掘立柱建物跡や井戸跡が確認されている。町・伊勢地区周辺は、17世紀初頭に伊達家家臣成田氏とその配下の足軽が移住した地とされており、街道沿いには上述したような屋敷が立ち並んでいたと考えられる。

II 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王地区公民館体育館建設に伴う発掘調査である。平成20年9月25日に多賀城市長菊地健次郎より当該地における体育館建設と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では基礎工事の際に直径40cm、長さ20～25mの杭基礎を72本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、杭基礎以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないとのことから記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、10月7日に多賀城市長より埋蔵文化財発掘の通知が官城県教育委員会教育長あてに提出され、発掘調査の実施に至ったものである。

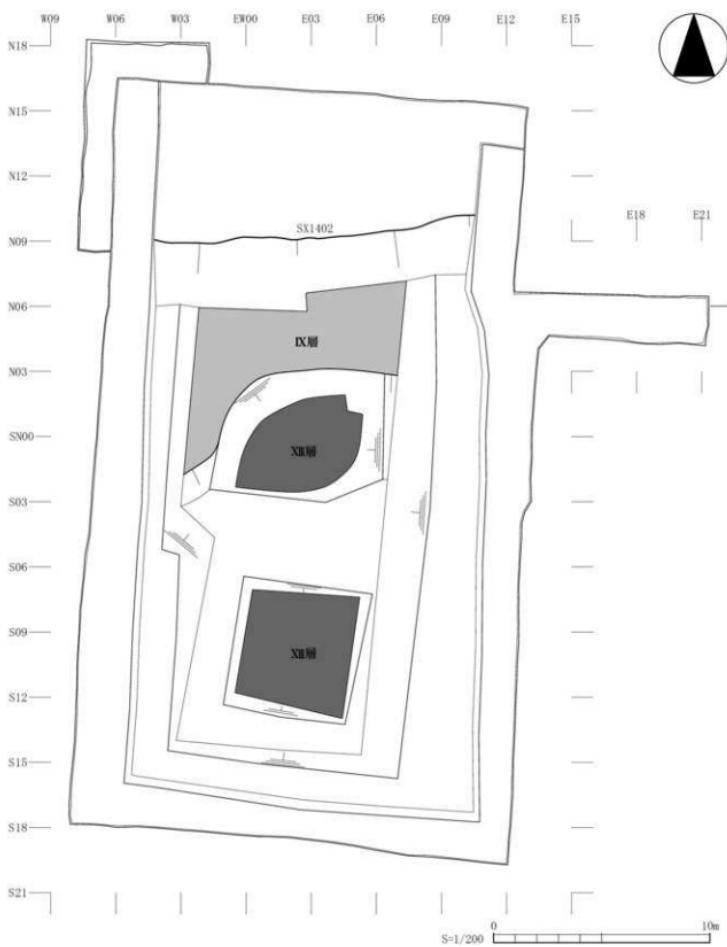
調査は10月29日から開始し、はじめに重機を使用して現代の盛土（I 1層）・水田・畑耕作土（I 2層）の除去を行った。土砂は下層の調査と作業時の安全確保のためすべて場外搬出とした。11月5日より作業員を動員して調査区南端から遺構検出作業を行い、並行して調査区壁際に排水溝を兼ねた土層観察用サブトレレンチを設定した。調査区南半部では想定していた北1東西道路跡を検出した。北半部では掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壌が検出されたが、遺構の分布状況は比較的希薄であった。19日からは北半部を中心とした検出状況の写真撮影と1/100スケールの平面図作成、および遺構の掘り込みを開始する。27日、SK1372 土壌より漆紙文書が出土する。12月3日からは北1東西道路跡の調査に取りかかり、側溝に4時期の変遷があることを確認する。以後、全城で各遺構埋土の掘り込み、写真撮影と1/20スケールの平面・断面図作成を行う。17日、ラジコンヘリコプターを使用して空中写真撮影を実施する。冬季間である1～2月は一時調査を中断し、翌年の3月5日から再開した。この年度末の調査は前年に掘り残していた道路側溝の古い段階と井戸跡を主に対象として進めた。井戸跡は3基が平安時代であり、これより古い土壌（SK1388）は奈良時代と判明した。古代の遺構面の調査はほぼ3月31日で終了した。平成21年度の調査は4月7日から開始した。まず、道路跡より古い河川跡の輪郭が確認されていたので、これの調査を先行した。その結果、

奈良時代までは遡らない平安時代の時期と考えられた。この河川跡の調査は4月18日までに終了し、22日より下層の古墳時代の調査に取りかかった。IV層除去後、北端部を除くほぼ全城でシルトと砂からなる縞状の堆積土が面的に確認され、この時期の大規模な河川跡と推測された。調査の計画を立てるために調査区のはば中央に幅1.5mの南北方向のトレンチを設定し人力で掘り進めたところ、最深で約28mに達することが判明した。堆積土は下層になるほど粗い砂になり、しかも湧水のためすぐに崖が崩壊してしまう状況であった。遺物の包含量は少量であったので、調査員立会のもと重機を使用して段掘りで堆積土を2回に分けて掘り進めた（1回目：5月19日～27日、2回目：6月3日～9日）。一方、調査区北端部ではV層上面で不整形の崖みを発見し、出土遺物から古墳時代前期の遺構と判明した。さらにこのV層を掘り下げる段階でVI1層が方形状に盛り上がるところがあり、現地説明会（5月30日）の時点では畦畔ではないかと考えていたが、V層を全て掘り下げるところ盛り上がりの内側で柱穴等を検出するおよび2軒の堅穴住居跡であることを確認した。VI1～VI3層掘り下げ後、VI4層上面では堅穴住居本体とそれを開む溝跡を発見した。古墳時代の河川跡調査終了後、2ヶ所に深堀区を設けさらに下層（弥生時代）の調査を続行した。北側の調査区ではVI4層より約1m下でⅣ層、さらにその下約1mでⅦ1・2層を検出した。いずれの層からも遺構・遺物は発見されなかった。6月20日にはほぼ全ての調査が終了した。6月23～24日にかけて現場内の環境整備と器材撤収を行った。6月25日～7月6日に埋め戻しを行い全ての業務を完了した。

III 調査成果

（1）層序

- 今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。
- I 1層：現代の表土・盛土層で、厚さは0.4～1mである。
- I 2層：現代の畠・水田耕作土層で、厚さは0.2～0.7mである。
- II 層：黒色粘質土で、厚さは10～20cmである。古代の遺構（道路跡）のくぼみに堆積している。市川橋・山王遺跡では10世紀前葉以降の堆積層として普遍的に確認される土層である。
- III 層：灰黄褐色砂質土で、厚さは15～35cmである。調査区南端付近のみで確認された。古代の遺構検出面。
- III 2層：灰黄褐色砂質土で、厚さは15～35cmである。調査区南端付近のみで確認された。
- IV 層：にぶい黄色砂で、厚さは10～30cmである。調査区北半部にはほぼ水平に堆積する。古代の遺構検出面。
- V 層：灰黄褐色砂質土で、厚さは50cm前後である。均質。調査区北端部で確認され、古墳時代前期の遺構検出面（第I面）。
- VI 1層：暗灰黄色砂で、厚さは5～15cmである。調査区北端部で確認され、古墳時代前期の遺構検出面（第II面）。a層は本層の崩壊土層。
- VI 2層：暗灰黄色砂で、厚さは5～15cmである。調査区北端部で確認される炭を主体とした遺物包含層。
- VI 3層：暗灰黄色砂で、厚さは5～15cmである。調査区北端部で確認される淡黄色砂質土が混じる斑状の堆積土。
- VI 4層：暗灰黄色砂で、厚さは5～15cmである。調査区北端部で確認され、古墳時代前期の遺構検出面（第III面）。



第4図 弥生時代調査区平面図

*以下の土層は調査区北端部で確認され、いずれも水平に堆積する。

VII 1層：にぶい黄色土で、厚さは15cm前後である。細砂・粗砂を部分的に含む。

VII 2層：黄褐色砂質土で、厚さは40cm前後である。1～2cm大の小石が若干含まれる。

VII 3層：黄褐色砂で、厚さは40cm前後である。細砂と砂の互層。

VIII層：灰褐色粘質土で、厚さは10cm前後である。植物遺存体と粘質土の互層。

IX層：オリーブ黒色粘土で、厚さは5cm前後である。弥生時代後期頃の堆積層

X 1層：灰オリーブ色砂質土で、厚さは5cm前後である。均質。

X 2層：暗オリーブ灰色砂質土で、厚さは30cm前後である。砂と粘質土の互層。

X 3層：緑灰色砂で、厚さは20cm前後である。均質。

XI 1層：明オリーブ灰色土で、厚さは40cm前後である。黒色粘土(ラミナ状)と砂の互層。

XI 2層：緑灰色砂で、厚さは20cm前後である。粘土と砂の互層。

VII層：灰色粘土で、厚さは20cm前後である。灰色と茶色の粘土層が交互に堆積する。

VII 1層：黒色粘土で、厚さは10cm前後である。均質。弥生時代中期葉頃の堆積層

VII 2層：暗灰色粘土で、厚さは10cm前後である。下面やや凹凸あり。

XIV層：オリーブ灰色砂質土で、厚さは25cm前後である。砂質土と砂の互層。

XV層：オリーブ灰色砂で、厚さは20cm以上である。均質な粗砂層。

(2) 発見遺構と遺物

弥生時代

弥生時代に相当する層の調査は、古墳時代前期層より下層のIX層、VII層を対象として一部深堀区を設定して実施した。いずれの土層も未分解の植物遺存体を含む腐植質粘土層であり、IX層は標高約2.4m、VII層は標高約1.2mの高さに位置する。各層上面で精査を行ったが想定されていた畦畔等の遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。なお、プラントオパール分析を実施したが、いずれの土壤からもプラントオパールは検出されなかった。

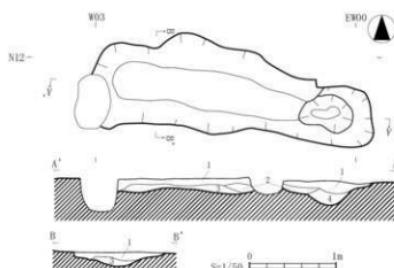
古墳時代

古墳時代の遺構は、調査区北端部で性格不明遺構1基、河川跡(第I面)、堅穴住居跡2軒と焼成遺構1基(第II面)、さらにその下層で堅穴住居跡1軒、焼成構2基(第III面)を検出した。

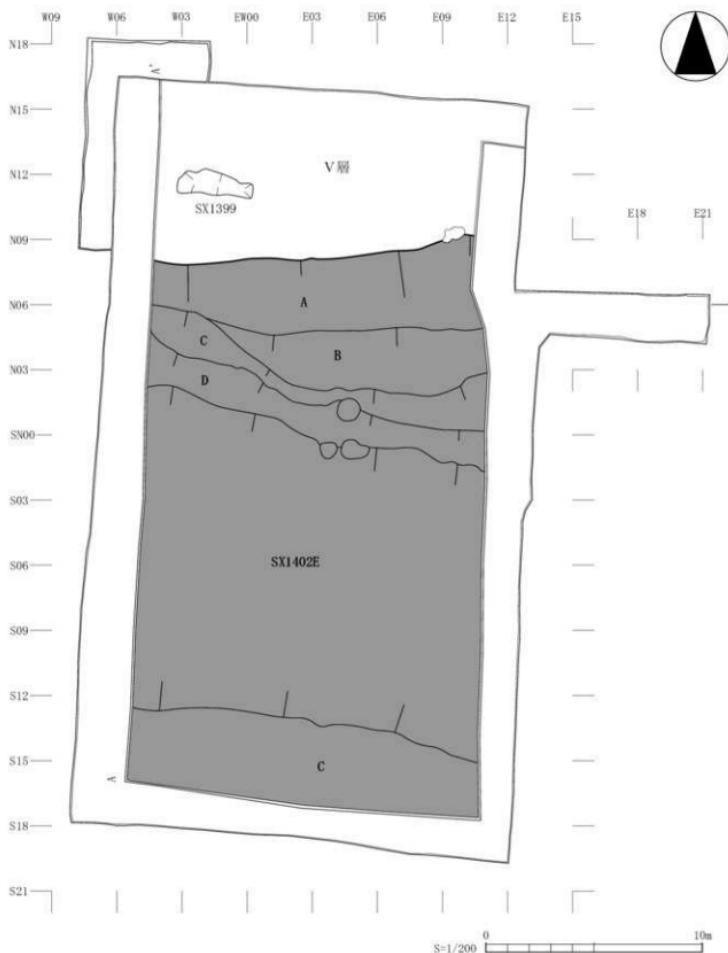
[第I面]

SX1399

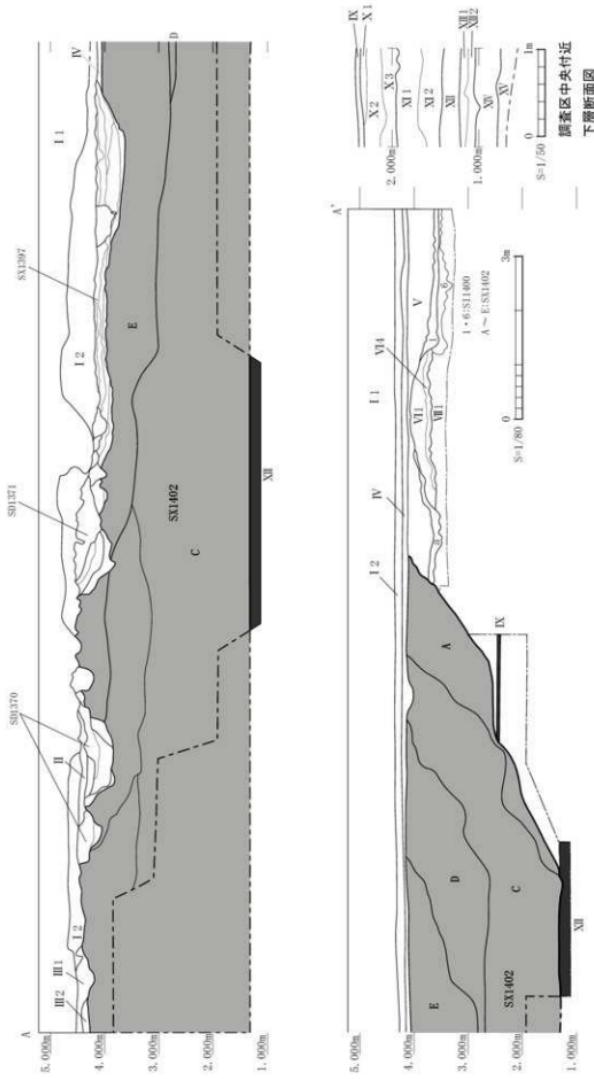
調査区北西付近のV層上面で発見した。平面形は東西に細長い不整な落ち込みで、規模は長軸3.26m、短軸1.05m、深さ28cmである。底面は緩やかな起伏をもち、東端付近は一段深くくぼむ。壁は内湾気味に緩やかに立ち上がる。埋土は4層に分けられいずれも自然堆積である。1～3層は褐灰色～黄橙色砂質土



第5図 SX1399平面・断面図



第6図 SX1402河川跡平面図



第7図 調査区西壁層序模式図
下層断面図

で均質な堆積である。4層は炭化物を含む灰黄褐色土である。

遺物は土師器の破片が若干出土している。

SX1402河川跡

調査区北端(古墳時代前期の遺構検出部分)を除くほぼ全域のV層上面で発見した東西方向の河川跡である。大別5時期(A～E)の変遷があり、時期が新しくなるにつれて北岸が南へと移動しており、幅、深さとも縮小していく。A期はB・C期に埋されているため北岸付近を検出したにすぎない。長さ19.4m以上、幅6.7m以上、深さ約2.8mである。B期もC期に埋されているため北岸の一部を検出したにすぎない。東西13m以上、幅3m以上である。A・B期の埋土は近似しており、細砂と植物遺存体層の互層である。C期は上部をD・E期に埋されているが、幅25.1m以上、深さ約2.8mである。埋土は北岸付近は細砂と植物遺存体層の互層であるが、中央より南は粗砂～小石の小波状堆積である。D期は幅6.9m以上、深さ約1.5mである。埋土は砂を主体としており、ほぼ水平に堆積する。E期は幅15.7m、深さ約1.3mである。埋土はシルト、細砂～粗砂が互層になるレンズ状堆積である。

遺物は塩釜式～南小泉式期の土師器高杯・鉢・壺・甕・瓶、土器片製円板および繩文・弥生土器の破片、チャート片が出土している。

【第Ⅱ面】

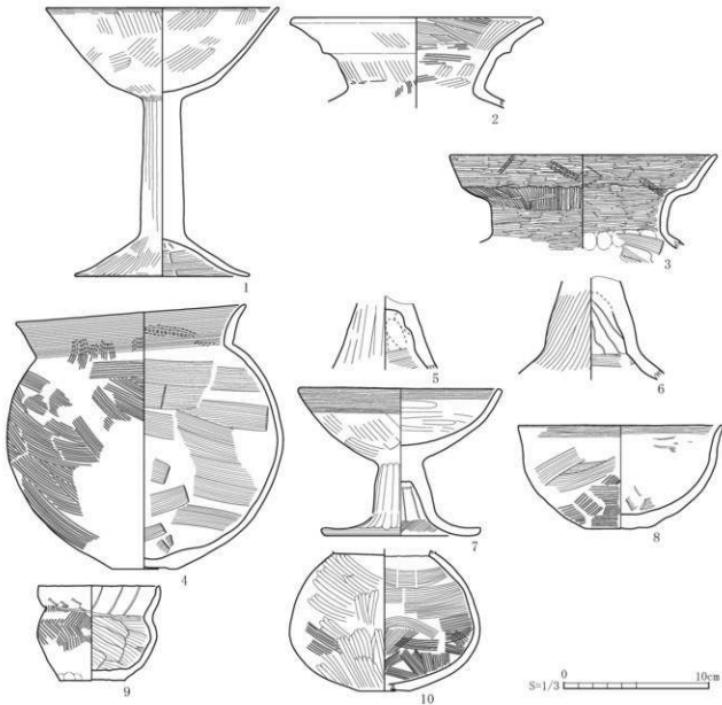
SI1400豎穴住居跡

調査区北西隅のVI1層上面で発見した。本住居跡は北西部が調査区外に延びているため、全容は明らかでないが、平面形は検出部分から隅丸方形と推定される。規模は南北約5.5m、東西1.4m以上、方向は東辺で測ると北で約30度東に偏している。残存壁高は約30cmで、北・東壁は垂直に立ち上がり上端で急角度に開く。南壁は緩やかに開きながら立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、床面下には約20cm掘りこまれた掘方が検出された。南壁ではオーハングする部分もある。主柱穴は2基検出され、柱が残存するもの(P1)と柱抜取り穴(P2)が見られるものがある。柱間は約3.1mである。貯蔵穴状ピット(P3)はP1の南東側で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.47m、短軸0.34m、深さ55cmである。埋土(4層)は灰黄褐色砂でVI1層のブロックを含む。住居内はV層と1～3層(褐灰色砂質土: VI1層に類似)で埋まっている、1層は壁際に厚く堆積し住居中央に向かって薄くなっていく。5層は炭化物を多く含む黒褐色土で、床面のやや低くなっているところに分布していた。生活時の堆積層と考えられる。6層は掘方埋土で灰黄色土と砂の斑状堆積である。

遺物は1・5層より土師器鉢・壺・甕の破片が少量出土している。

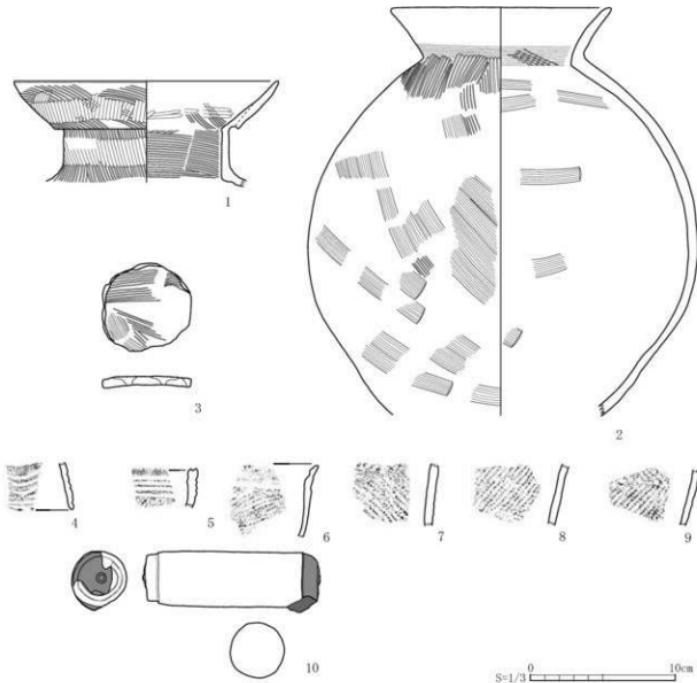
SI1401豎穴住居跡

調査区北東隅のVI1層上面で発見した。本住居跡は北東部が調査区外に延びているため、これも全容は明らかでない。検出部分から平面形は方形と推定される。規模は東西約7.5m、南北5m以上、方向は東辺で測ると北で約41度東に偏している。残存壁高は30～40cmで、壁は緩やかに外傾する。床面はほぼ平坦で、掘方は住居床面より10～20cm掘りこまれている。南東辺付近の2基(P7・8)の柱穴は主柱穴の可能性があり、いずれからも柱抜取り穴が検出された。住居内はV層と1層(褐灰色砂質土: VI1層に類似)で埋まっている、いずれも水平に堆積している。2層は炭化物を多く含む黒褐色土で、P9周辺に分布していた。生活時の堆積層と考えられる。3層は掘方埋土でVI1層ブロックを含む灰黄褐色土である。



| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 存率 | 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録号 | 備考 |
|----|--------|---------|-------------------------------------|--------------------------------|-------------------|----------------|------|----------|-------------|----------------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・高杯 | SX1402A | 杯部:ヨコナデ→ヘラミガキ 脚部:ヨコナデ→ヘラミガキ | 杯部:ヨコナデ→ヘラミガキ 脚部:ヘラナデ | (16.0) 5/24 | (12.0) 4/24 | 18.5 | 15-1 | R26 | 塙釜式 |
| 2 | 土師器・壺 | SX1402A | ハケメ→ヘラナデ→ヘラミガキ | ハケメ→ヘラナデ→ヘラミガキ | (16.8) 15/24 | - | - | R43 | 塙釜式 | |
| 3 | 土師器・壺 | SX1402A | 口縁部:ハケメ→ヘラミガキ | 口縁部:ハケメ→ヘラミガキ 体部:指捺有り→ヘラナデ | 18.2 24/24 | - | 6.4 | 15-2 | R33 | 塙釜式 |
| 4 | 土師器・甕 | SX1402A | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ | 15.6 23/24 | (4.4) 13/24 | 17.5 | 15-7 | R44 | 塙釜式 |
| 5 | 土師器・高杯 | SX1402E | 脚部:ヘラミガキ | 脚部:指ナデ→ヘラナデ | - | - | - | 15-4 | R29 | 南小泉式 |
| 6 | 土師器・高杯 | SX1402E | 脚部:ヘラミガキ | 脚部:シザリ目 瓶部:ヘラナデ | - | - | - | R31 | 南小泉式 | |
| 7 | 土師器・高杯 | SX1402E | 杯茎:ケズリ、ヨコナデ→ヘラミガキ 脚部:ヨコナデ→ヘラミガキ | 杯部:ヨコナデ→ヘラミガキ 脚部:シザリ目、ヘラナデ | (14.0) 19.5/24 | (10.8) 8/24 | 10.1 | 15-5 | R32 | 内・外面赤彩 南小泉式 |
| 8 | 土師器・杯 | SX1402E | 口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ→ヘラナデ 底部:ヘラケズリ | 口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ 底部:ヘラナデ | (14.0) 13/24 | 5.0 24/24 | 7.1 | 15-6 | R8 | 南小泉式 |
| 9 | 土師器・甕 | SX1402E | 体部:ハケメ→ヘラミガキ | 口縁部:ヘラナデ 体部:ヘラナデ→ヘラミガキ | (8.3) 7/24 | 4.5 24/24 | 6.5 | 15-3 | R3 | 塙釜式 |
| 10 | 土師器・壺 | SX1402E | 体部:ハケメ→ヘラミガキ | 体部:ハケメ→ヘラナデ | - 4/24 | (3.5) 4/24 | - | R50 | 塙釜式 外面赤彩 | |

第8図 SX1402河川跡出土遺物(1)



| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|--------------|---------|------------------|---------------|------------------|-------------|------------|----------|------------------|----------------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・壺 | SX1402E | 口縁部～腹部：ハケメ→ヘラミガキ | 口縁部：ハケメ→ヘラミガキ | (18.2) 9/24 | - | - | R41 | 塗釜式 | |
| 2 | 土師器・壺 | SX1402E | 口縁部：ヨコナデ | 口縁部：ハケメ→ヨコナデ | (15.2) 235/24 | - | - | 15-8 | R40 | 塗釜式 or 南小泉式 |
| 3 | 土器片・製円板 | SX1402E | ハケメ→ナデ | ヘラナデ | (長径) 6.3 | (短径) 5.6 | (厚) 0.7 | R17 | 土師器焼転用 | |
| 4 | 赤土器・灰陶 | SX1402E | 液状文 | | - | - | - | R21 | 弦生中期・脚部 | |
| 5 | 绳文土器・深鉢 | SX1402E | 横位弦綱・純文 | | - | - | - | R20 | 縄文晩期 | |
| 6 | 绳文土器・深鉢 | SX1402E | 横位弦綱・純文 | | - | - | - | R24 | 縄文晩期 | |
| 7 | 绳文土器・深鉢 | SX1402E | 純文 | | - | - | - | R22 | 縄文晩期 | |
| 8 | 绳文土器・深鉢 | SX1402E | 純文 | | - | - | - | R23 | 縄文晩期 | |
| 9 | 绳文土器・深鉢 | SX1402E | 純文(羽状) | | - | - | - | R25 | 縄文晩期 | |
| 10 | 木製品・用 途不明 | SX1402E | 最大径：3.8、長さ：12.3 | | | | | R1 | アミは鉄分に よる腐食部分 | |

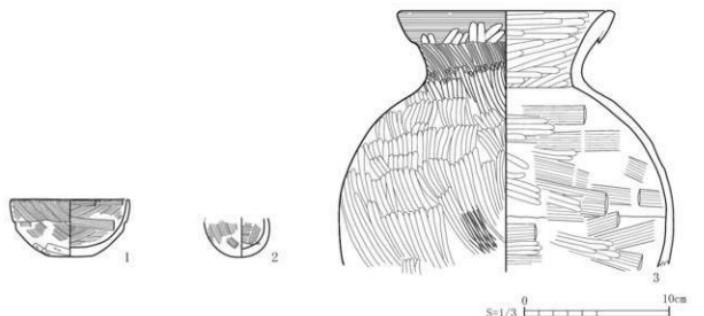
第9図 SX1402河川跡出土遺物（2）

遺物は1層より土師器鉢・壺・甕の破片が出土している。

SX1403 焼成遺構

SI1401南東コーナー部の南側に隣接するVI1層上面で発見した。ややくずれた隅丸方形を呈し、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ15cmである。北壁面が薄く焼けており、断面形はレンズ状を呈する。埋土は3層に分けられたが、それぞれ灰白色土、炭、灰が互層になるものである。

遺物は土師器壺・甕の破片が出土している。



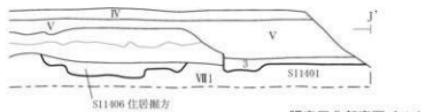
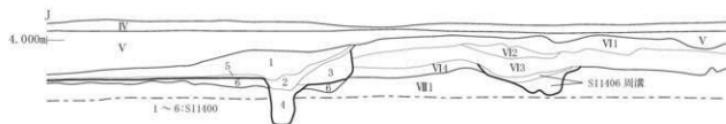
| 番号 | 種類 | 遺構・層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 高さ 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|-----------------|------------------|--------------------------------|----------------------------|-----------------|-----------------|------|----------|------|-----------------------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・鉢 | SI1400 床面上 | 口縁～体部：ヘラナデ 体部下半：ヘラケズリ | 口縁～体部：ヘラナデ | (80) 16/24 | 30 24/24 | 3.95 | 17.5 | R10 | 内・外面底部 から体部にかけてス付着 |
| 2 | 土師器・ミニ チアニア甕 | SI1401 床面上 | ヘラナデ | ヘラナデ | - | 1.0 24/24 | - | 17.6 | R19 | |
| 3 | 土師器・甕 | SI1401 PB・抜取穴 | 口縁部：ヨコナデ→ヘラミガキ 体部：ハケメ→ヘラミガキ | 口縁部：ヘラミガキ 体部：ヘラナデ→ヘラミガキ | (15.5) 17/24 | - | - | - | R56 | |

第11図 SI1400・1401 穫穴住居跡出土土器

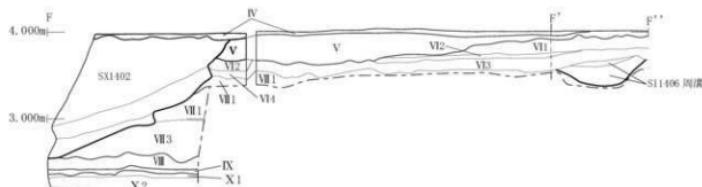
【第Ⅲ面】

SI1406 穫穴住居跡

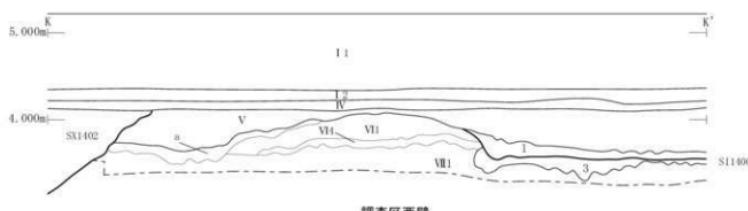
調査区北東隅のVI4層上面で発見した。北東部分が調査区外に位置することや上層で検出したSI1401上部を壊されているため、その構造については不明な部分が多い。床面等は検出されず、主柱穴と掘方周溝を確認できたに過ぎない。住居本体に伴う掘方周溝は一辺約5mの方形状を呈していたと思われる。幅は約1m、深さは10～27cmである。主柱穴は3基検出され、掘方周溝のコーナー部に位置する。3基のうち1基(P3)で柱痕跡を2基(P1・2)で柱抜取り穴を確認した。柱間は26～27mである。住居の方向は上層で検出したSI1401とはほぼ同じである。本住居にはこれを取り囲む周溝が確認された。形態は隅丸方形を呈していたと推定され、住居と周溝の間は約2mの幅員をもつ。幅は1～25m、深さは30～40cmである。埋土は2層に分けられ、1層がVI4層のブロックを含む灰黄褐色土、2層が炭が多く含みVI4層に近似する灰黃



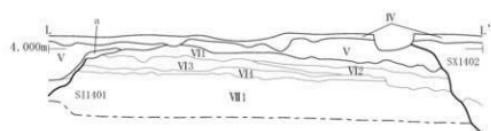
調査区北部東西ベルト



調査区中央南北ベルト



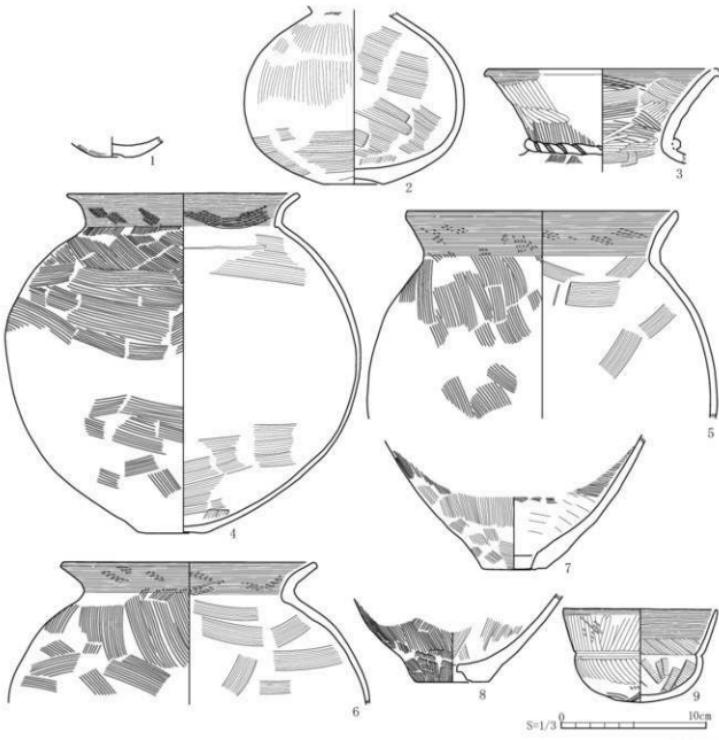
調査区西壁



調査区東壁

S=1/50 0 3m

第13図 古墳時代調査区層序断面図



単位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 器高 | 写真 登録番号 | 備考 |
|----|-------|----------|-------------------------------|------------------------------|-------------------------------|------------------|--------------|--------------------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | |
| 1 | 土師器・鉢 | 周溝埋土 | ケズリ→ヘラミガキ | ヘラナデ | - 2.5 24/24 | - | R53 | |
| 2 | 土師器・壺 | 周溝埋土 | ヘラナデ、ヘラミガキ | ヘラナデ | - (4.0) 15/24 | - 19.1 | R31 | 外面赤彩 |
| 3 | 土師器・壺 | 周溝埋土 | ハケメ、ヨコナデ→ヘラミガキ | ヘラナデ、ハケメ→ヘラミガキ | (15.8) 8.24 | - - 19.2 | R27 | |
| 4 | 土師器・甕 | 周溝埋土 | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ | 16.0 24/24 4.8 24/24 | 23.5 | 19.3 | R37 |
| 5 | 土師器・甕 | 周溝埋土 | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ | 口縁部:ヨコナデ、ハケメ 体部:ハナデ | (18.6) 23/24 | - - | R45 | |
| 6 | 土師器・甕 | 周溝埋土 | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハナデ | 17.2 24/24 | - - | R48 | |
| 7 | 土師器・瓶 | 周溝埋土 | 体部:ハケメ、ヘラナデ 底部:ヘラナデ | 体部:ハケメ、ヘラナデ 底部:ヘラケズリ→ヘラナデ | - 24/24 | 4.5 - 19.4 | R4 | 單孔 |
| 8 | 土師器・瓶 | 周溝埋土 | ケズリ→ハケメ | ケズリ→ヘラナデ | - 24/24 | 5.0 - | R6 | 單孔。孔の周縁 打ち欠き痕あり |
| 9 | 土師器・鉢 | SX1405底部 | ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 底部:ケズリ→ハケ調整 | ヨコナデ→ヘラナデ | (10.4) 5/24 | 0.6 24/24 | 6.45 19.6 | R7 丸底 |

第14図 SI1406 積穴住居跡出土遺物

褐色粘質土である。

遺物は土師器鉢・壺・甕の破片が2層よりまとまって出土している。

SX1405 焼成遺構

SI1406南東コーナー部の南側に隣接するVI4層上面で発見した。不正な隅丸方形を呈し、一辺0.8m、深さは20cmである。底面はやや凹凸があり、断面形はレンズ状を呈する。壁・底面がうすく焼けており、埋土は1層が若干炭が混じる緑灰色土で、2層が炭、灰、焼土が多量に混じる赤灰色土である。

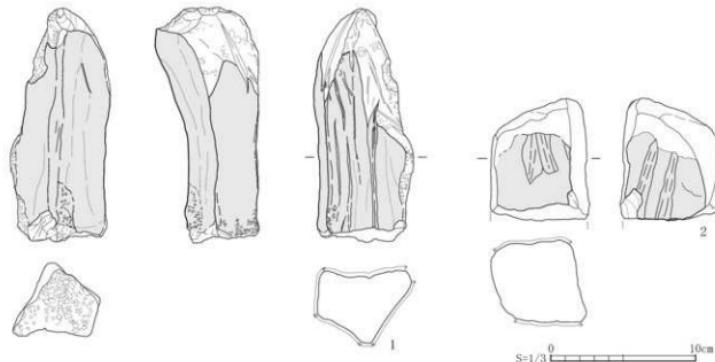
遺物は底面より土師器鉢の完形が出土している。

SX1404 焼成遺構

SX1405の南西側に近接するVI4層上面で発見した。不整な円形を呈し、長径0.45m、短径0.35m、深さは19cmである。北・西壁はオーバーハングし、壁・底面はうすく焼けている。埋土は3層に分けられ、1層が均質な灰黄色土、2層が灰層、3層が炭層である。遺物は出土していない。

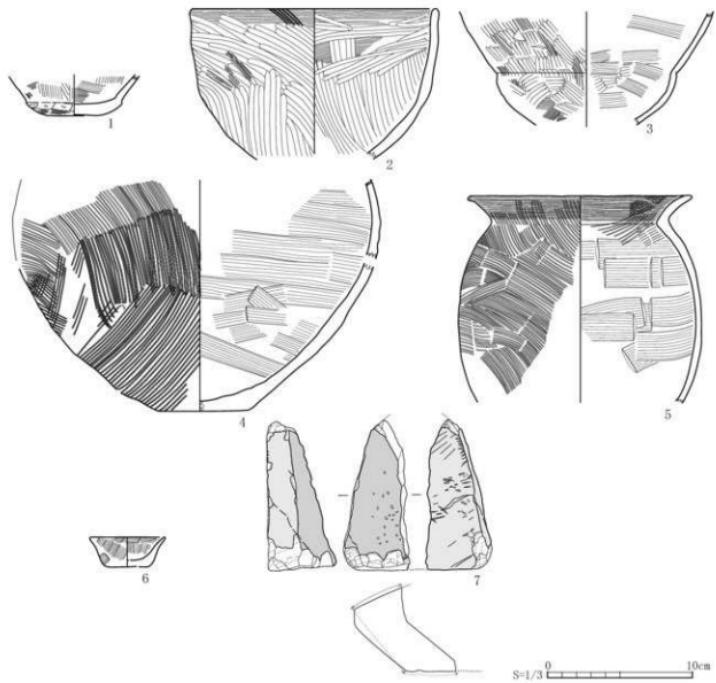
基本層出土の遺物

V1層より土師器器台・鉢・甕・小型土器、VI1層より土師器高杯・鉢・壺・甕・瓶、砥石、焼粘土片、VI2層

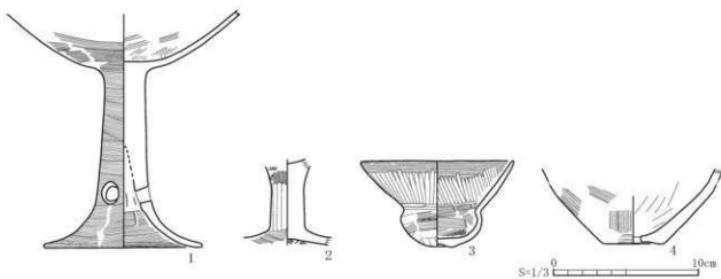


| 单位(cm) | | | | | | |
|--------|----|------|------------------------------|------|-----|-----|
| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | 写真版 | 登録号 | 備考 |
| 1 | 砥石 | VI1層 | 長さ:16.25、幅6.9、厚さ:7.0、重量680g | 18-3 | R38 | |
| 2 | 砥石 | VI1層 | 長さ:8.45、幅6.85、厚さ:5.55、重量585g | 18-4 | R34 | 砂岩? |

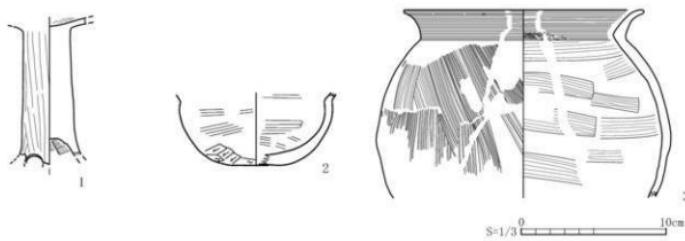
第15図 VI1層出土遺物



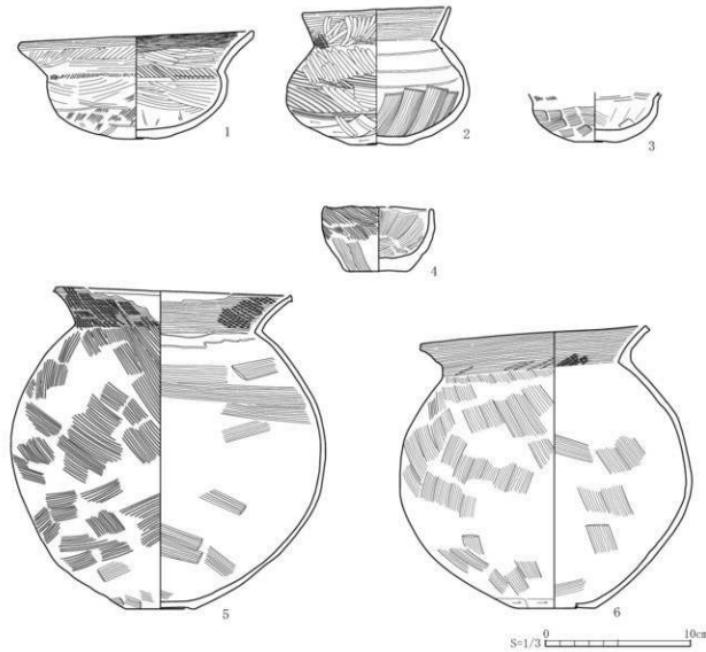
第16図 VI4層出土遺物



第17図 VI2層出土土器



第18図 VI 1層出土土器



第19図 V層出土土器

単位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|----------------|------|--|---------------|-----------------|-------------|-----|----------|------|----|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・鉢 | V14層 | 上半部:ハケメ→ヘラミガキ 下半部:手縫ヘラケズリ→ハケメ 底部:やや上げ底 | 体部:ヘラナデ→ヘラミガキ | - | 36 24/24 | - | 18.5 | R16 | |
| 2 | 土師器・鉢 | V14層 | ハケメ→ヨコナデ→ヘラミ ガキ | ヘラナデ→ヘラミガキ | (16.8) 4/24 | - | - | | R49 | |
| 3 | 土師器・鉢 | V14層 | ハケメ→ミガキ | ヘラナデ→ヘラミガキ | - | - | - | | R52 | |
| 4 | 土師器・甕 | V14層 | ハケメ | ヘラナデ | - | 54 24/24 | - | | R55 | |
| 5 | 土師器・甕 | V14層 | ハケメ→ヨコナデ | ハケメ→ヘラナデ | (15.0) 3/24 | - | - | | R51 | |
| 6 | 土器蓋・三 チュア土器 | V14層 | ヘラナデ | ヘラナデ | (52) 16/24 | 32 24/24 | 205 | 18.6 | R18 | |
| 7 | 砥石 | V14層 | 長さ:10.3、幅:4.65、厚さ:4.7、重量:210g | | | | | 18.7 | R11 | |

第16図 V14層出土遺物観察表

単位(cm)

| 番号 | 種類 | 遺構 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|--------|----------|-----------------------------------|-------------------------------|-----------------|-----------------|-----|----------|------|-----------------------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・高杯 | V12層 | 杯部:ハケメ→ナデ 脚部:ヘラミガキ→ナデ 裾部:ナデ | 杯部:ヘラナデ 脚部:ヘラナデ 腹部:ヨコナデ | - | (10.8) 13/24 | - | 17.1 | R35 | 円窓3ヶ所あり 外面・杯部内面に赤彩 |
| 2 | 土師器・高杯 | V12層 | 脚部:ハケメ→ヘラミガキ 裾部:ヘラナデ | 杯部:ヘラナデ 脚部:ハケメ→ヘラナデ | - | - | - | 17.2 | R28 | |
| 3 | 土師器・鉢 | V12層 | 口縁部:ヨコナデ→ヘラミガキ 体部:底部:ヘラナデ | 口縁部:ヨコナデ→ヘラミガキ 体部:ヘラナデ | (10.6) 12/24 | 18 24/24 | 5.9 | 17.3 | R9 | |
| 4 | 土師器・瓶 | V12層 | ヘラナデ | ヘラナデ | - | 4.0 24/24 | - | 17.4 | R5 | 單孔 |

第17図 V12層出土土器観察表

単位(cm)

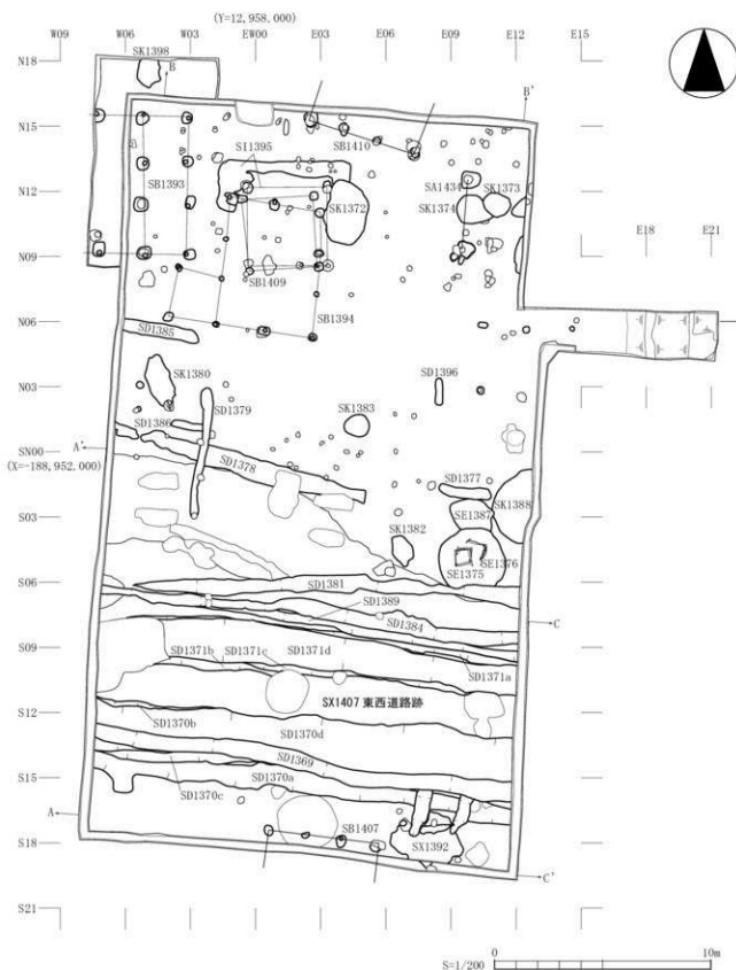
| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|--------|------|---------------------|-------------------------|-----------------|---------------|------|----------|------|---------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・高杯 | V11層 | 脚部:ヘラミガキ | 杯部:ヘラミガキ 脚部:ハケメ→ヘラナデ | - | - | - | 18.1 | R30 | 円窓3ヶ所あり |
| 2 | 土師器・鉢 | V11層 | 体部:ヘラミガキ 下半部:ケズリ | 体部:ヘラミガキ | - | (3.6) 6/24 | - | 18.2 | R14 | 二次加熱 |
| 3 | 土師器・甕 | V11層 | 口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ | 口縁部:ハケメ→ヘラナデ 体部:ヘラナデ | (16.3) 9/24 | - | 12.9 | | R54 | |

第18図 V11層出土土器観察表

単位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|-------|----|--|------------------------------|-----------------|--------------|------|----------|------|--------------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・鉢 | V層 | 口縁部:ハケメ→ヘラミガキ 体部:ケズリ→ハケメ→ヘラミガキ(部分的) | ハケメ→ヘラミガキ 底部付近:ヘラナデ | (16.3) 20/24 | 2.6 24/24 | 7 | 16.1 | R1 | 外面にスス状の付着物あり |
| 2 | 土師器・鉢 | V層 | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ 体部:ハケメ→ヘラミガキ 底部付近:ケズリ→ヘラミガキ | 口縁部:ヨコナデ→ヘラナデ 体部:ハケメ→ヘラナデ | (10.2) 23/24 | 3.8 24/24 | 9.3 | 16.2 | R2 | |
| 3 | 土師器・鉢 | V層 | 体部:ケズリ→ヘラナデ | 体部:ヘラナデ | - | 2.8 24/24 | - | 16.3 | R15 | |
| 4 | 土師器・鉢 | V層 | 口縁部:ハケメ→ヘラナデ 体部:ハケメ→ヘラナデ | 口縁部:ヘラナデ 体部:ヘラナデ | (7.2) 1/24 | 3.9 24/24 | 4.4 | 16.4 | R12 | |
| 5 | 土師器・甕 | V層 | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ハケメ 体部下:ヘラナデ | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ヘラナデ | (16.4) 7/24 | 4.8 24/24 | 22.5 | 16.5 | R36 | |
| 6 | 土師器・甕 | V層 | 口縁部:ヘラナデ→ヨコナデ 体部:ヘラナデ 体部下端:ヘラケズリ | 口縁部:ハケメ→ヨコナデ 体部:ヘラナデ | (15.9) 23/24 | 5.6 24/24 | 19.1 | 16.6 | R39 | |

第19図 V層出土土器観察表



第20図 検出構全体図(古代・中世以降)

より土師器高杯・鉢・壺・甕・瓶、VI4層より土師器鉢・壺・甕・瓶・小型土器、砥石が出土した。

古代

SX1407北1東西道路跡

調査区南半部、SX1379・1402河川跡埋土上面で発見した東西道路跡である。SD1389・1396溝跡と重複し、これよりも古い。東西大路から約110m北に位置しており、城外の方格地割のうち、北1東西道路に相当する。長さ19.2mまで検出し、東西とも調査区外に伸びている。南北両側に素掘りの側溝（南側溝：SD1370、北側溝：SD1371）を伴っており、これらの新旧関係から4時期の変遷（A～D期）があることを確認した。

A期：南側溝（SD1370a）、北側溝（SD1371a）を確認した。南側溝は比較的の残存状況が良かったが、北側溝はB～D期とはほぼ同位置のため底面付近しか残存していない。路幅は側溝心々間で約6.0mである。方向は南側溝でみると東で約8度南に偏している。規模は南側溝で上幅0.7～1m、下幅0.3～0.9m、深さ10～40cmである。底面は船底形で、壁は内湾しながら緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、上層がにぶい黄橙色土、下層が灰褐色砂質土である。北側溝は上幅0.7～0.8m、下幅0.3～0.5m、深さ20～30cmである。底面は船底形で、壁は内湾しながら緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土ににぶい黄橙色土ブロックが混じる。

遺物は土師器杯（B II類）・甕（B類）、須恵器甕、丸瓦II類が出土している。

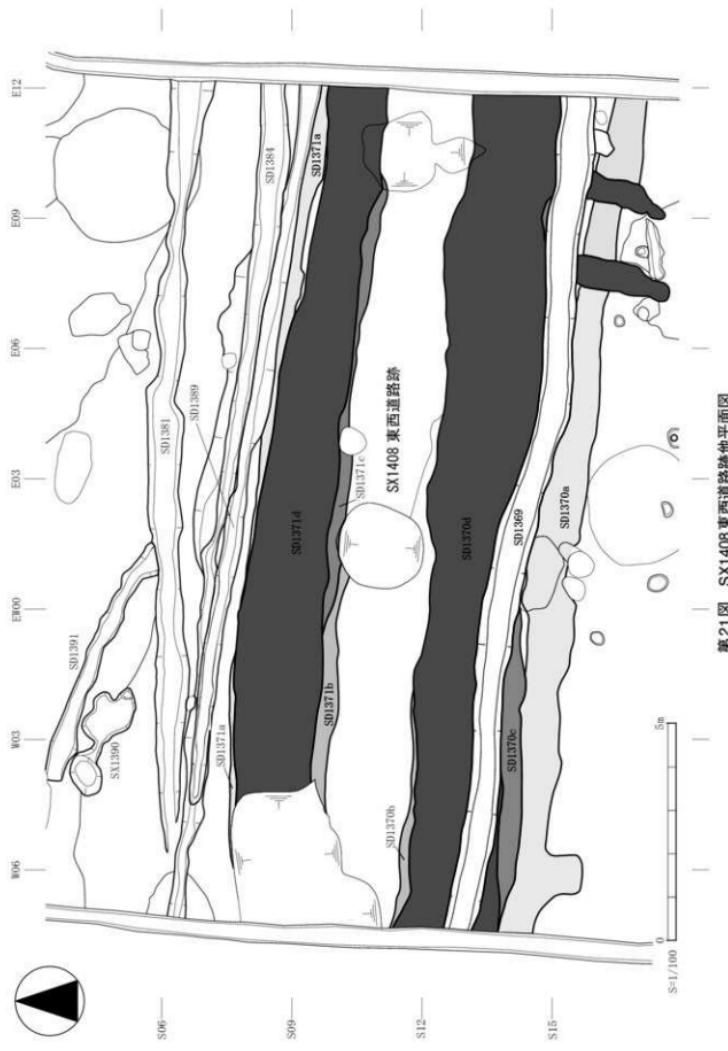
B期：南側溝（SD1370b）と北側溝（SD1371b）を確認した。A期と比較して路面の幅が縮小している。南側溝はD期に大半が壊されており、西端付近で北壁の一部を確認したにすぎない。深さは50cmである。埋土は黒褐色土粒が混じる淡黄色土である。北側溝もC・D期に壊されているため、西半部南壁を部分的に確認したにすぎない。深さは50～70cmである。埋土は南側溝と同じである。

遺物は土師器杯（B II・B V類）・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）、高台付杯・瓶・甕・瓶、平瓦（II B類）が出土している。

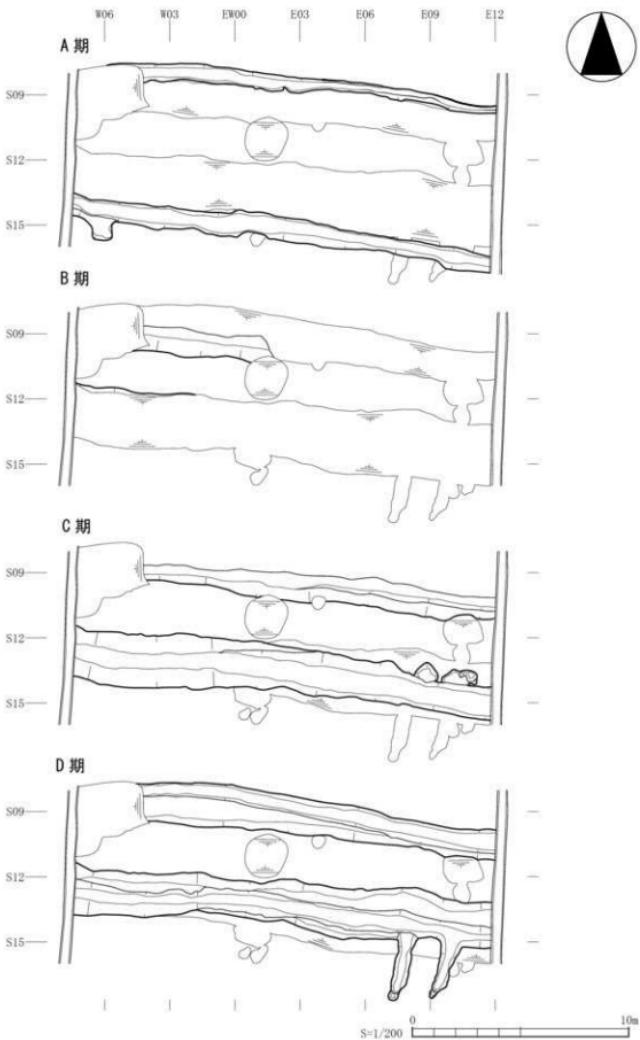
C期：南側溝（SD1370c）、北側溝（SD1371c）を確認した。南側溝はおおむね全体を把握できたが、北側溝はD期とほぼ同位置のため南壁～底面を部分的に検出した。規模は南側溝で上幅1.5～2.4m、下幅0.7～1m、深さ65～70cmである。断面形は逆台形状で、底面はやや凹凸がある。埋土は灰白火山灰の小ブロックが混じる黒褐色粘質土である。北側溝は上幅0.9～1.7m、下幅0.3～0.7m、深さ50～60cmである。埋土は灰白火山灰の小ブロックが混じる暗褐色砂である。

遺物は土師器杯（B I・B II c・B V類）、高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（III・V類）、瓶・甕、須恵系土器杯・高台付杯、丸瓦（II B・II C類）、平瓦（II B類）、製塙土器、焼粘土、鋳型、炉底滓、砥石、磨石が出土している。

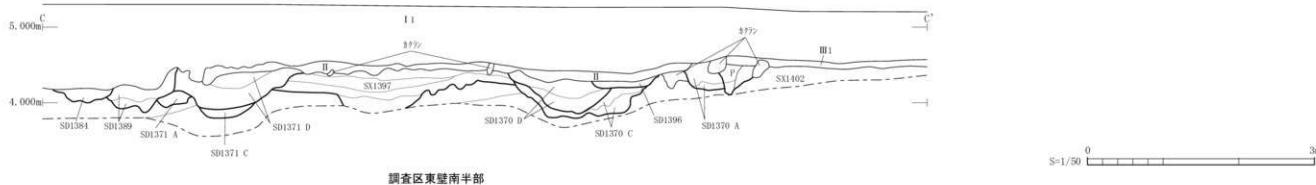
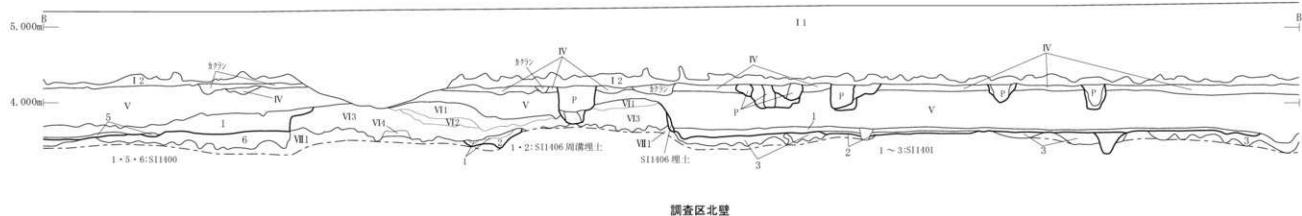
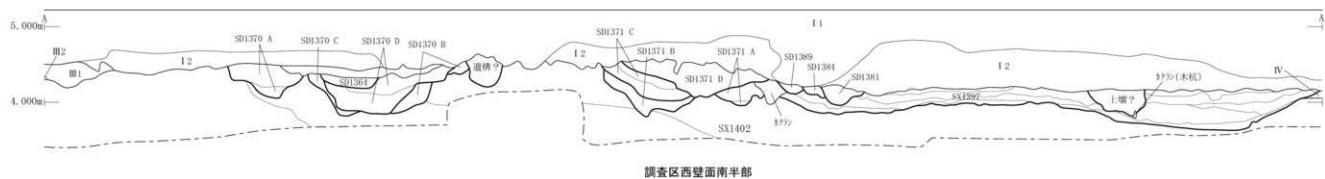
D期：南側溝（SD1370d）、北側溝（SD1371d）を確認した。SD1371dは SX1392と重複しておりそれよりも新しい。路幅は側溝心々間で3.7～4.3mである。方向は北側溝みると東で約7度南に偏している。規模は南側溝で上幅1.5～2.4m、下幅0.3～0.7m、深さ55～60cmである。南側には段がつく。また、東端付近の南壁際に南北方向の溝状遺構が2条取り付く。いずれも長さ3m、幅0.5～0.9m、深さ6～23cmとほぼ同じ規模を持つ。南端と側溝本体との比高は30～40cmである。埋土は2層に分けられ、上層が暗褐色土、下層が木炭粒を含む灰褐色粘質土である。北側溝は上幅1.1～2m、下幅0.4～0.8m、深さ25～35cmである。北側には段がつく。埋土は南側溝と同じである。



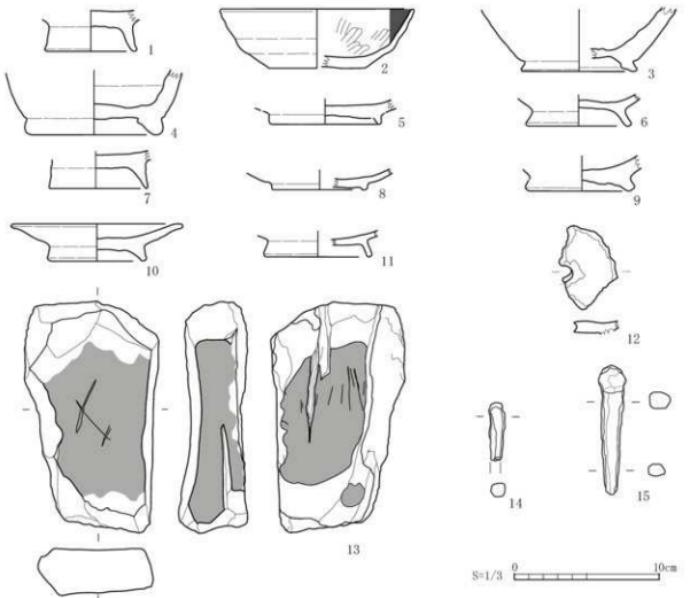
第21図 SX1408東西道路跡平面図



第22図 SX1408東西道路跡側溝変遷図



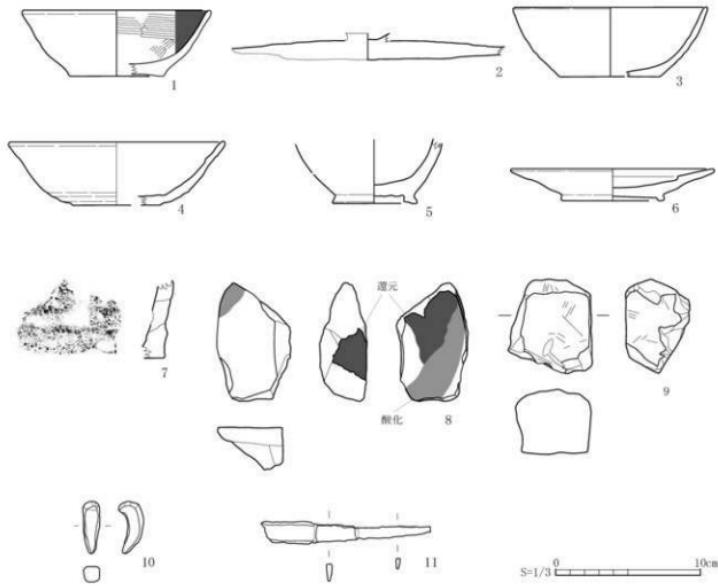
第23図 調査区内各壁面断面図



単位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 底径 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------------|----|------------------------|---------------------|--------------------|----------------|----------|----------|-------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | |
| 1 | 土師器 高台付杯 | c | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ ハラミガキ、黒色処理 | - (6.0) 3/24 | - | - | R112 | |
| 2 | 土師器 杯 | c | ロクロナデ 底部:回転ハラケズリ | ハラミガキ、黒色処理 | (13.0) 5/24 | (6.6) 12/24 | 4.1 | R89 | |
| 3 | 須恵器 瓶 | c | ロクロナデ | ロクロナデ | - | 8.0 | - | R98 | |
| 4 | 須恵器 瓶 | c | ロクロナデ 底部:回転ハラケズリ | ロクロナデ | - | (8.6) 7/24 | - | R99 | |
| 5 | 須恵器 高台付杯 | d | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | - | (7.4) 10/24 | - | R110 | |
| 6 | 須恵器 高台付杯 | c | ロクロナデ | ロクロナデ | - | 6.8 | - | R108 | |
| 7 | 須恵器 高台付杯 | d | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | (6.6) 0/24 | 6.5 24/24 | 2.6 | R113 | |
| 8 | 須恵器 高台付杯 | d | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | - | (6.5) 9/24 | - | R115 | |
| 9 | 須恵器 高台付杯 | d | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | - | 6.65 | - | R78 | |
| 10 | 須恵器 瓶 | d | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | (11.4) 6/24 | (6.4) 2/24 | 2.6 | R107 | |
| 11 | 灰陶陶器 瓶 | d | ロクロナデ | ロクロナデ | - | (7.2) 6/24 | - | R70 | |
| 12 | 須恵器 高台付杯 | d | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R114 | 底部を穿孔 |
| 13 | 砥石 | c | 長さ:154.0、幅:95.0、厚さ:4.7 | | | | 24-3 | R94 | |
| 14 | 鉄釘 | d | 長さ:4.0、幅:1.1、厚さ:0.9 | | | | | R2 | |
| 15 | 鉄釘 | d | 長さ:9.0、幅:1.9、厚さ:1.7 | | | | 24-2 | R8 | |

第24図 SD1370南側溝跡出土遺物



単位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|------------|----|--------------------------------|------------|-------------------|---------------|----------|----------|----------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | |
| 1 | 土師器・杯 | a | ロクロナデ 底部:回転糸切り→手持ち ヘラケズリ | ヘラミガキ、黒色處理 | (128) 10/24 | (64) 10/24 | 4.45 | R103 | |
| 2 | 須恵器・蓋 | d | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R117 | |
| 3 | 須恵器・杯 | c | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | (132) 2/24 | (68) 4/24 | 4.8 | R104 | |
| 4 | 須恵器・杯 | c | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | (146) 0/24 | (60) 6/24 | 4.4 | R105 | |
| 5 | 須恵器・瓶 | d | ロクロナデ | ロクロナデ | - | 5.7 24/24 | - | R97 | |
| 6 | 灰釉陶器 一段 | a | ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ | ロクロナデ | (138) 3/24 | (68) 9/24 | 2.2 | 24-4 | R24 刷毛塗り |
| 7 | 製塙土器 | c | | | | | - | R96 | 輪横み痕有り |
| 8 | 説型 | c | ロクロナデ | 回転ヘラケズリ | 長さ:80、幅:505、厚さ:29 | | | R95 | |
| 9 | 砥石 | c | 長さ:64、幅:5.7、厚さ:4.4 | | | | | R93 | |
| 10 | 鉄釘 | d | 長さ:36、幅:1.15、厚さ:1.5 | | | | | R9 | |
| 11 | 刀子 | d | 長さ:11.6、幅:1.5、厚さ:0.8 | | | 24.5 | R5 | | |

第25図 SD1371北側溝跡出土遺物

遺物は土師器杯(B II・B II c・B V類)・高台付杯・水滴・甕(B類)、須恵器杯(I c・II・III・V類)・高台付杯・瓶・甕・蓋、須恵系土器杯・高台付杯・高台付皿・台付鉢、綠釉陶器、丸瓦(II B類)、軒平瓦、平瓦(II A・II B・II C類)、漆付着土器、製塙土器、羽口、鉄滓、チャート片が出土している。

柱間は約3.2mである。方向は北で約4度東に偏している。柱穴は一辺60～80cmの不整な隅丸方形で、深さは30～50cmである。掘方埋土は黄橙色砂質土ブロックを含む黒褐色土である。

遺物は鉄鏃が出土している。

SI1395 穫穴住居跡

調査区北端部中央付近のIV層上面で発見した。SB1394、SB1409、SK1372と重複し、それよりも古い。残存状況は非常に悪く北辺の掘方と主柱穴4基を検出したのみである。方向は発掘基準線とほぼ一致している。規模は東西6m、南北2.3m以上で、主柱穴の位置関係から一辺約6mの正方形を呈していたと推定される。掘方の深さは15cmで、埋土は黒褐色粘土のブロックが混じる黄褐色砂である。主柱穴は住居の四隅に位置しており、柱間は3.6～3.7mである。柱穴の平面形は不整形で一辺20～30cm、深さは20～30cmである。いずれからも柱抜取り穴が確認されている。

遺物は柱穴より土師器杯(A・B類)、甕(B類)、須恵器杯が出土している。

SE1375 井戸跡

調査区中央付近、東壁際のIV層上面で発見した。SE1376と重複しておりそれよりも新しい。方形の横板組み井戸側を持つ構造である。掘方はSE1376井戸側抜取り穴を兼用している。井戸側は一辺約75cmの横板を方形に組み4隅を丸柱でおさえる構造である。横板の重なりは、北・東面で3枚、南・西面で2枚確認され、井戸側全体での高さは約60cmである。検出面から井戸底までの深さは約1.7mである。井戸側内埋土は均質な青灰色粘土である。

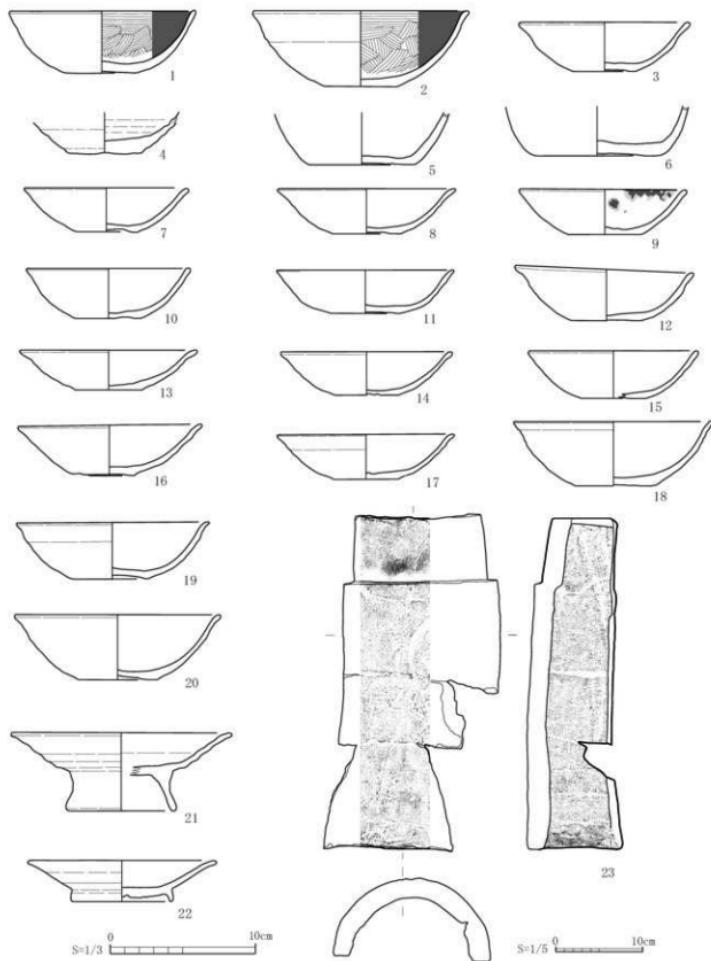
遺物は、土師器杯(B・V類)、甕(B類)、須恵器杯(Ⅲ類)、瓶・甕・須恵器系土器杯、丸瓦(II類)・平瓦(I・A・II・C類)が出土している。



第31図 SE1375 井戸跡出土土器

SE1376 井戸跡

調査区中央付近、東壁際のIV層上面で発見した。SE1375、SE1387、SD1381と重複しており、SE1375、SD1381より古くSE1387より新しい。井戸側は掘方中央のやや北寄りで確認したが、南・西辺はSE1375構築の際に抜き取られており残存状況は悪い。井戸側の構造は北辺を参考にすると、隅に支柱を立てそれ



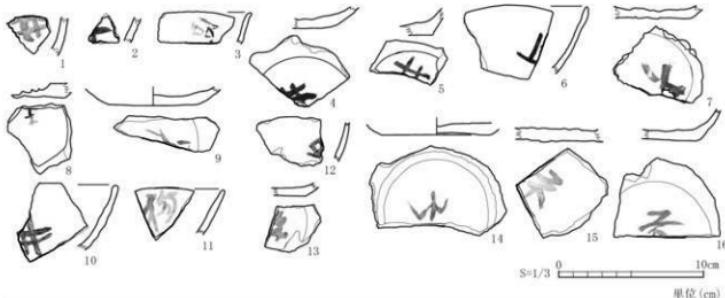
第33図 SE1376井戸跡出土遺物(1)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 | 底径 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 | 単位(cm) |
|----|---------------|-----------|---------------------|------------|----------------|---------------|-----------|------|----------|-----------------|----|--------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | | | |
| 1 | 土師器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色処理 | 127 24/24 | 49 24/24 | 425 | 20-2 | R8 | | | |
| 2 | 土師器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色処理 | (148) 5/24 | (50) 14/24 | 52 | | R12 | | | |
| 3 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (114) 8/24 | 43 24/24 | 34 | | R22 | | | |
| 4 | 須恵器・杯 | 井戸内埋 土 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | - | (52) 19/24 | 29 | | R92 | | | |
| 5 | 須恵器・杯 | 掘方 | ロクロナデ 底部:ヘラ切り | ロクロナデ" | - | (72) 14/24 | - | | R91 | | | |
| 6 | 須恵器・杯 | 掘方 | ロクロナデ 底部:ヘラ切り | ロクロナデ" | - | 82 24/24 | - | | R90 | | | |
| 7 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | 112 24/24 | 41 24/24 | 3 | 20-3 | R5 | | | |
| 8 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (120) 6/24 | 47 24/24 | 31 | | R17 | | | |
| 9 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | 125 24/24 | 50 24/24 | 315 | 20-4 | R32 | 内面の一部 に油煙付着 | | |
| 10 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (112) 14/24 | 46 24/24 | 345 | 20-5 | R6 | | | |
| 11 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (120) 10/24 | 48 24/24 | 3 | | R15 | | | |
| 12 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (118) 15/24 | (46) 17/24 | 35 | 20-6 | R16 | 底面に油煙 付着 | | |
| 13 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (120) 9/24 | 46 24/24 | 275 | | R18 | 内面の一部 に油煙付着 | | |
| 14 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (116) 5/24 | 43 24/24 | 3 | | R20 | | | |
| 15 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (114) 9/24 | (44) 14/24 | 33 | | R23 | | | |
| 16 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (125) 19/24 | 35 24/24 | 35 | 20-7 | R13 | 内外面に油 煙付着 | | |
| 17 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (119) 7/24 | 44 24/24 | 31 | | R19 | | | |
| 18 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (136) 16/24 | 52 24/24 | 445 | 20-8 | R9 | 内外面に油 煙付着 | | |
| 19 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (131) 16/24 | 50 24/24 | 39 | 20-9 | R10 | | | |
| 20 | 須恵系土器 杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ" | (140) 5/24 | 54 24/24 | 45 | | R14 | 口野部の一部 に油煙付着 | | |
| 21 | 須恵系土器 高台付杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:ロクロナデ | ロクロナデ" | (150) 7/24 | (74) 11/24 | 54 | 21-1 | R11 | 底面に油煙 付着 | | |
| 22 | 須恵系土器 高台付杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ | ロクロナデ" | (128) 1/24 | (66) 13/24 | 29 | | R116 | | | |
| 23 | 丸瓦 | 抜取穴 | 長さ:38.2、幅:18、厚さ:2.4 | | | | | 21-4 | R58 | II Ba類 | | 21-5 |

第33図 SE1376 井戸跡出土遺物(1)観察表

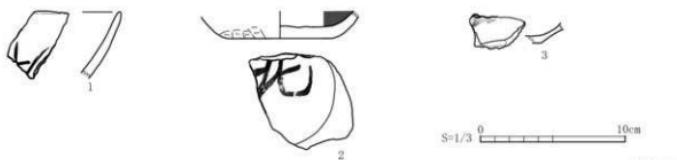
に横桟を取り付けて縦板を固定している。井戸側の平面形は一辺約80cmの正方形を呈していたと推定され、縦板材は幅の異なる長さ1m、幅60cmものと長さ80cm、幅20cmのものを組み合わせている。検出面から井戸底までの深さは約1.5mである。埋土は10層に分けられる。1層～5層は抜き取り穴埋土で、黒褐色～黒色粘質土にぶい黄色砂質土のブロックを含むことから人為的に埋め戻されている。6層は黒色粘質土で井戸側内に堆積した自然堆積土である。なお、3層～6層には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。7層～10層は掘方埋土で、グライ化した粗砂を主体としており、それに黒褐色粘質土のブロックが混じる。

遺物は抜取り穴埋土より土師器杯(A・B I・B I b・B I c・B II・B V類)・壺(B類)、須恵器杯(I・II・III・V類)・高台付杯・高杯・瓶・壺、須恵系土器杯・高台付杯・墨書き土器、丸瓦(II B類)、平瓦(II B類)、炉底塗が出土している。井戸側内に堆積土より土師器杯(B I・B I b・B II・B II c・B V類)・壺(B類)、須



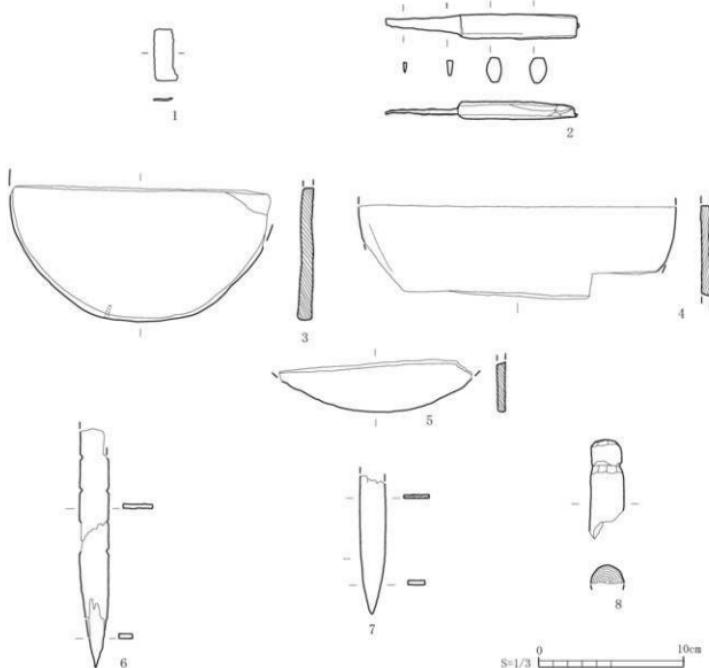
| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|-------|-----------------------|------------|-----------|-----------|----|----------|-----------|-------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ | ロクロナデ、黒色処理 | - | - | - | 21-3 | R72 | 墨書「井」 |
| 2 | 土師器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ | ロクロナデ、黒色処理 | - | - | - | R73 | 墨書「口」 | |
| 3 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R56 | 墨書「口」 | |
| 4 | 須恵器・杯 | 井戸内埋土 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | (7.3) | - | R57 | 墨書「井」カ | |
| 5 | 須恵器・杯 | | ロクロナデ | ロクロナデ | - | (6.2) | - | R102 | 墨書「井」カ | |
| 6 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R65 | 墨書「可」カ | |
| 7 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部: ヘラ切り | ロクロナデ | (6.4) | - | - | R64 | 墨書「六」カ | |
| 8 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部: ハラケズリ | ロクロナデ | (5.1) | - | - | R66 | 墨書「口」 | |
| 9 | 須恵器・杯 | 握方 | ロクロナデ、手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | (6.2) | - | - | R71 | 墨書「口」口 | |
| 10 | 須恵器・杯 | 握方 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R69 | 墨書「井」 | |
| 11 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R67 | 墨書「物」カ | |
| 12 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R63 | 墨書「万」カ | |
| 13 | 須恵器・杯 | 握方 | ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | - | - | - | R62 | 墨書「口」 | |
| 14 | 須恵器・杯 | 握方 | ロクロナデ 底部: 回転系切り | ロクロナデ | (7.3) | - | - | R61 | 墨書「子」 | |
| 15 | 須恵器・杯 | 握方 | ロクロナデ 底部: ヘラ切り | ロクロナデ | - | - | - | R60 | 墨書「ネ」(示)カ | |
| 16 | 須恵器・杯 | 抜取穴 | ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | (8.0) | - | - | R59 | 墨書「侯」の旁カ | |

第34図 SE1376井戸跡出土墨書き土器(2)



| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|----------|-----------------------|---------------------|-----------|-----------|----|----------|----------|--------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・杯 | SK1372層 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | 23-6 | R53 | 墨書「本」カ |
| 2 | 土師器・杯 | SK1372層 | ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ | ロクロナデ ヘラミガキ—黒色処理 | - | (7.1) | - | 23-5 | R54 | 墨書「北」 |
| 3 | 土師器・杯 | SD1384埋土 | ロクロナデ | ロクロナデ | - | - | - | R55 | 墨書「口」 | |

第35図 SE1372土壤他出土墨書き土器

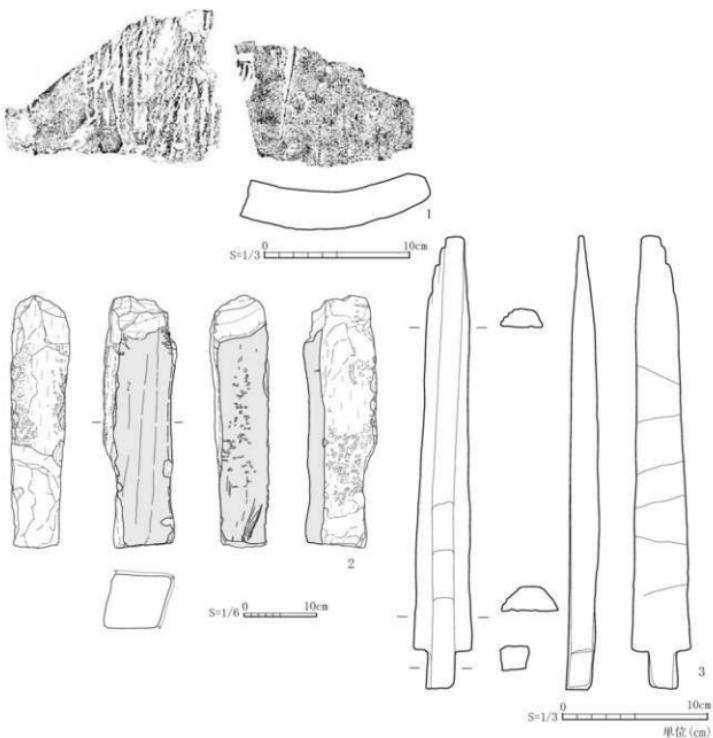


| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真版 登録番号 | 備考 |
|----|----------|-----|-----------------------------|----|-----------|-----------|----|-------------|----|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | |
| 1 | 銅製品 | 抜取穴 | 長さ:3.55、幅1.55、厚さ:0.15、重量:7g | | | | | 21-2 | R7 |
| 2 | 刀子 | 抜取穴 | 長さ:1.34、幅:1.7、厚さ:1.1 | | | | | | R1 |
| 3 | 木製品(漆物)板 | 抜取穴 | 径:18.0、厚さ:1.0 | | | | | R55 | |
| 4 | 木製品(漆物)板 | 抜取穴 | 径:22.0、厚さ:0.7 | | | | | R56 | |
| 5 | 木製品(漆物)板 | 抜取穴 | 径:21.0、厚さ:0.6 | | | | | R57 | |
| 6 | 木製品・蓋 | 抜取穴 | 長さ:16.5、幅:2.0、厚さ:0.3 | | | | | R58 | |
| 7 | 木製品・蓋 | 抜取穴 | 長さ:19.6、幅:1.8、厚さ:0.3 | | | | | R60 | |
| 8 | 木製品・丸木 | 抜取穴 | 径:2.4、長さ:7.0 | | | | | R59 | |

第36図 SE1376井戸跡出土遺物(3)

惠器杯(II・III・V類)・瓶・甕、須恵系土器杯・高台付杯、墨書き土器、銅製品が出土している。掘方埋土より土器杯(B I・B II・B V類)・甕(B類)、須恵器杯(II・III・V類)・高台付杯・蓋・甕、墨書き土器、丸瓦(II類)、平瓦(II B・II C類)、土器片製円板(須恵器甕転用)が出土している。

SE1387井戸跡



| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | 写真版 | 登番 | 緑号 | 備考 |
|--------------|-----|-----|---------------------------------|------|-----|----|-----------------|
| 1 | 平瓦 | 抜取穴 | 厚さ:26 | | R44 | | [物]の刻印 |
| 2 | 砥石 | 抜取穴 | 長さ:34.9、幅:9.15、厚さ:7.8、重量:4.350g | 22-2 | R42 | | |
| 3 〔用達不明品〕 | 木製品 | 抜取穴 | 長さ:32.3、幅:4.0、厚さ:1.7 | | R67 | | 加工痕あり 木取り:板目 |

第37図 SE1387井戸跡出土遺物

調査区中央付近、東壁際のIV層上面で発見した。SE1376、SK1388と重複しており、SE1376より古くSK1388より新しい。井戸側は掘方の北西寄りに存在したとみられるが、土台部を残してすべて抜き取られている。井戸底より若干浮いた状態で検出された井戸土台は、長さ約50cmの丸木で正方形に組まれている。埋土は6層に分けられる。1層～2層は抜取り穴埋土で、暗緑灰～黒色粘質土に暗緑灰色砂質土のブロックを含むことから人為的に埋め戻されてたと考えられる。3層～6層は掘方埋土でオリーブ色砂質土

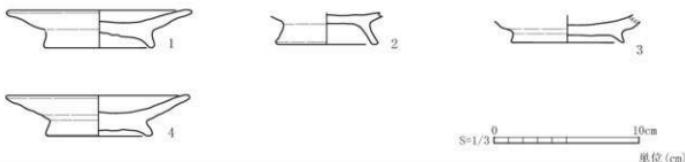
と砂が主体となり、褐灰色粘土ブロックが混じる。

遺物は、土師器杯・甕(A・B類)、須恵器甕、平瓦(II B・II C類)、砥石、木製品(用途不明品)、竹製品(編物)が出土している。

SD1369溝跡

調査区南端部のSD1370溝跡埋土上面で発見した溝跡である。方向は東で約8度南に偏しており、調査区中央付近で蛇行する。規模は長さ19.3m以上、上幅0.6~0.9m、下幅0.3~0.5m、深さ8~15cmである。底面は平坦で壁は内湾気味に立ち上がる。比高はほとんどない。埋土は黒色粘質土でII層に近似する。

遺物は土師器杯(B V類)・高台付杯・甕(B類)、須恵器杯(III・V類)・瓶・甕、須恵系土器杯・高台付杯・高台付皿、縁釉陶器、灰釉陶器瓶、丸瓦・平瓦、鐵滓が出土している。



第38図 SD1369溝跡出土土器

SD1377溝跡

調査区のはば中央付近のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。SE1387井戸跡と重複し、これよりも新しい。規模は長さ2.46m、上幅0.4~0.5m、下幅0.3m、深さ37cmである。底面は概ね平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。埋土は4層に分けられ、1層が暗灰色土のブロックが混じる灰黃褐色土黃灰色砂質土、2層が暗緑灰黄色粘質土、3層が暗青灰色土のブロックが混じる黒褐色粘質土、4層が綠灰色土である。

遺物は土師器杯(B類)・甕(B類)、須恵器杯(III・III A・V類)・甕が出土している。

SD1378溝跡

調査区中央付近の西半部、IV層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1379溝跡、小ピットと重複し、これらよりも古い。方向は東で約16度南に偏している。規模は長さ12m、上幅1m、下幅0.5m、深さ10~20cmである。

遺物は土師器杯(B V類)・盤(A類)・甕(A類)、須恵器長頸瓶・丸瓦が出土している。

SD1379溝跡

調査区中央付近の西半部、SX1397埋土上面で発見した南北方向の溝跡である。SD1378・1386溝跡と重複し、これらよりも古い。方向は北で約6度東に偏している。規模は長さ6.1m、上幅0.2~0.4m、下幅0.15

～0.2m、深さ30cmである。断面はU字形を呈する。埋土は2層に分けられ、1層が木炭粒を含む黒褐色粘質土、2層が浅黄色土である。

遺物は土師器杯（A・B I・B II類）、壺（B類）、須恵器杯（I・III・V類）、瓶・壺・蓋、瓦、刀子が出土している。

SD1381溝跡

調査区中央付近のやや南寄り、SX1397河川跡埋土上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1384溝跡、SE1376井戸跡と重複し、これらよりも新しい。方向は北で約2度東に偏している。規模は長さ17m以上、上幅0.3～1m、下幅0.2～0.5m、深さ10～25cmである。底面は丸底で壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層が黒褐色土、2層が黒褐色土のブロックを含む褐色砂である。

遺物は土師器杯（B II c類）、壺（B類）、須恵器瓶・壺、須恵系土器杯、平瓦が出土している。

SD1384溝跡

調査区南半部、SX1397河川跡埋土上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1389・1381溝跡と重複し、SD1389より新しくSD1381よりも古い。方向は北で約7度東に偏している。規模は長さ19.3m以上、上幅0.5～0.8m、下幅0.1～0.4m、深さ20cmである。比高はほとんどない。断面は船底形を呈する。埋土は黒褐色土の單層である。

遺物は土師器杯（B II・B V類）、須恵器杯（V類）、高台付杯・瓶・壺、須恵系土器杯、平瓦、墨書き器が出土している。

SD1385溝跡

調査区のほぼ中央付近の北西より、IV層上面で発見した溝跡である。方向は東で約13度南に偏している。規模は長さ3.6m以上、上幅0.6m、下幅0.3～0.4m、深さ10cmである。断面形は浅い皿形である。埋土は3層に分けられ、1層が黒褐色粘土、2層がオリーブ褐色土、3層が黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SD1386溝跡

調査区のほぼ中央付近の北西より、IV層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1379溝跡と重複し、これより古い。規模は長さ1.4m以上、上幅0.3～0.35m、下幅0.1～0.18m、深さ30cmである。断面形はU字形で、一部南壁が段状になる。埋土は3層に分けられ、1層が木炭粒を含む黒褐色土、2層が地山小ブロックを含む黒褐色土、3層が褐灰色砂質土である。

遺物は土師器壺（B類）、須恵器杯（III類）が出土している。

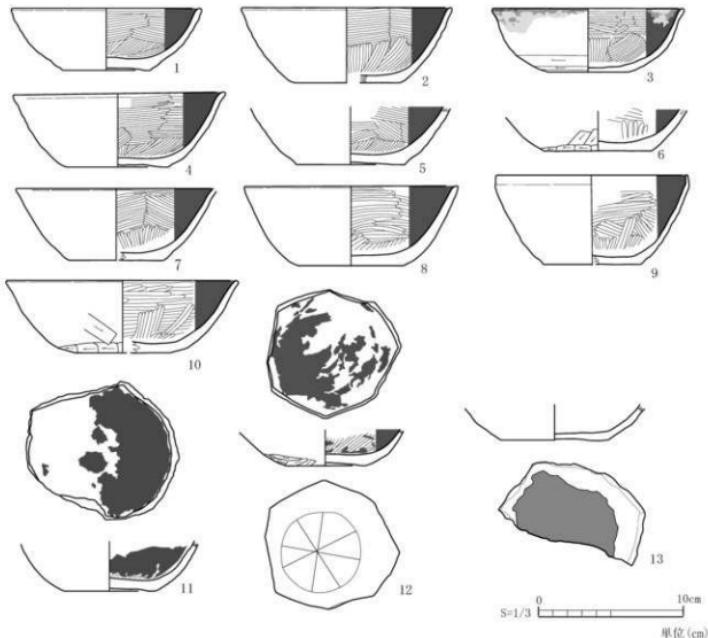
SD1389溝跡

調査区南半部、SX1397河川跡埋土上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1384溝跡、SX1407道路跡と重複し、SX1407よりも古く、ほとんどがSD1384に壊されているため残存状況が悪い。規模は長さ15m以上、上幅0.8m、下幅0.4m、深さ50cmである。断面は逆台形を呈し、底面はやや凹凸がある。埋土は1層が黒色粘質土、2層が緑灰色砂質土である。

遺物は土師器杯（B類）、壺（B類）、須恵器杯（III類）、壺、丸瓦（II B類）、平瓦が出土している。

SD1396溝跡

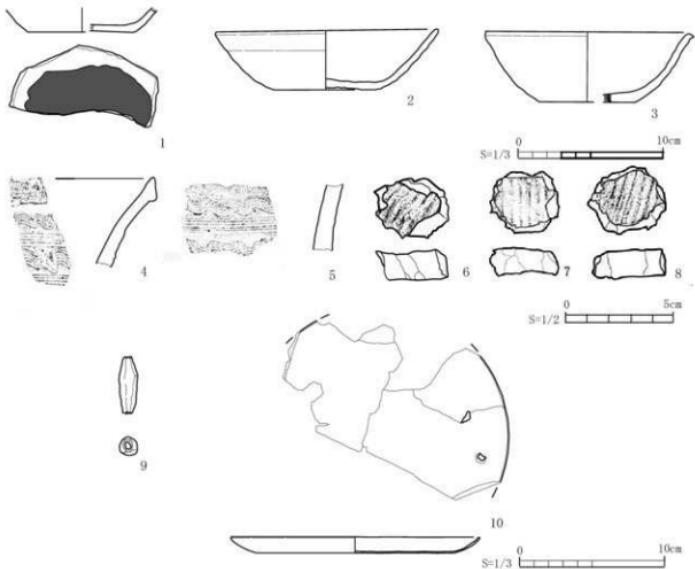
調査区のほぼ中央付近の東寄り、IV層上面で発見した南北方向の溝状遺構である。規模は長さ1.25m、上幅0.3m、下幅0.2m、深さ20cmである。断面形はU字形である。埋土は2層に分けられ、1層が木炭粒を



S=1/3 0 10cm
单位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 (mm) | 底径 (mm) | 高さ (mm) | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|----|----------------------------|---------------------|-----------------|----------------|------------|----------|----------|----------------------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色處理 | (12.7) 6.24 | 6.0 24/24 | 4.3 | | R25 | |
| 2 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色處理 | (14.2) 14/24 | (7.1) 17/24 | 5.2 | 23-1 | R26 | |
| 3 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ | ヘラミガキ、黒色處理 | (13.0) 8.24 | (5.5) 17/24 | 4.4 | | R27 | 内外の底面部に 油煙状付着物あり |
| 4 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色處理 | (14.4) 15/24 | 6.8 24/24 | 5.1 | 23-2 | R29 | |
| 5 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色處理 | - | 7.5 24/24 | - | | R75 | |
| 6 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:手持ちヘラケズリ | ヘラミガキ、黒色處理 | - | 7.4 24/24 | - | | R76 | |
| 7 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ ヘラミガキ、黒色處理 | (14.4) 6.24 | (6.4) 5.24 | 4.95 | | R77 | 底部から底面部にか けてすすが付着 |
| 8 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り+手持ちヘラケズリ | ロクロナデ ヘラミガキ、黒色處理 | (14.4) 1.24 | (7.2) 16/24 | 5.5 | | R79 | |
| 9 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:手持ちヘラケズリ | ロクロナデ ヘラミガキ、黒色處理 | (13.2) 1.24 | (6.2) 7/24 | 5.6 | | R82 | |
| 10 | 土師器・杯 | 1層 | ロクロナデ 底部:手持ちヘラケズリ | ヘラミガキ、黒色處理 | (15.6) 8.24 | (6.6) 8/24 | 5 | | R74 | |
| 11 | 土師器・杯 | 1層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色處理 | - | 6.2 24/24 | - | 23-4 | R33 | 内面に塗付着 |
| 12 | 土師器・杯 | 2層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り+手持ちヘラケズリ | ヘラミガキ、黒色處理 | - | 5.4 24/24 | - | | R80 | 内面に塗付着 底面部に刻畫 |
| 13 | 土師器・杯 | 3層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ヘラミガキ、黒色處理 | - | (6.0) 12/24 | - | | R118 | 塗付着 |

第42図 SK1372土壤出土遺物(1)



単位(cm)

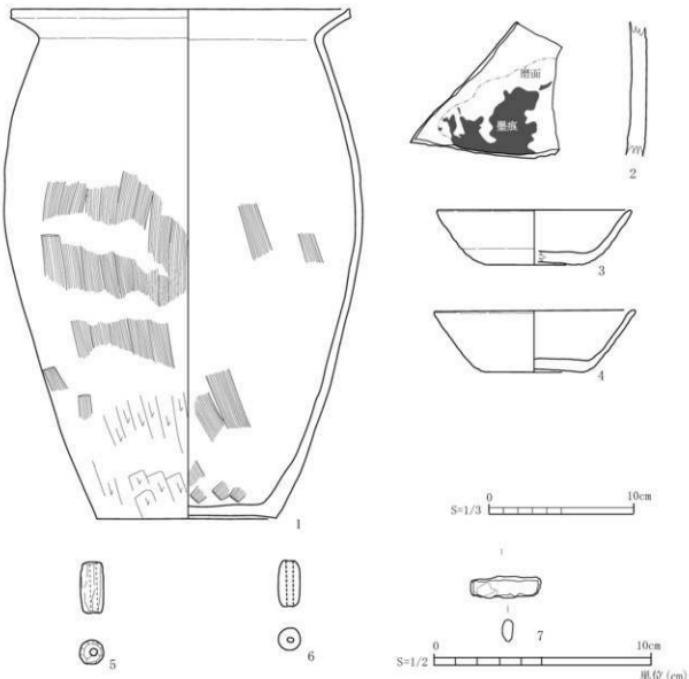
| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 |
|----|--------------|----|--------------------------------|--------------------|---------------------|----------------|-----|----------|------|--------|
| | | | 外 面 | 内 面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・杯 | 3層 | ロクロナデ ^① 底部:回転系切り | ヘラミガキ、黒色處理 | - (7.4) 12/24 | - | - | R119 | 漆付着 | |
| 2 | 須恵器・杯 | 5層 | ロクロナデ ^② 底部:へラ切り | ロクロナデ ^③ | (15.1) 16/24 | 6.8 24/24 | 4.1 | 23-3 | R30 | |
| 3 | 須恵器・杯 | 3層 | ロクロナデ ^④ 底部:回転系切り | ロクロナデ ^⑤ | (14.0) 9/24 | (6.6) 10/24 | 4.8 | | R1 | |
| 4 | 須恵器・甕 | 4層 | 柳葉波状文 | ロクロナデ ^⑥ | - | - | - | | R24 | |
| 5 | 須恵器・甕 | 4層 | 柳葉波状文 | ロクロナデ ^⑦ | - | - | - | | R25 | |
| 6 | 土器片割円板 | 2層 | 最大幅:36、最大厚:1.5 | ロクロナデ ^⑧ | - | - | - | 23-9 | R57 | 須恵器變転用 |
| 7 | 土器片割円板 | 3層 | 最大幅:32、最大厚:1.3 | ロクロナデ ^⑨ | - | - | - | 23-10 | R58 | 須恵器變転用 |
| 8 | 土器片割円板 | 2層 | 最大幅:35、最大厚:2.0 | ロクロナデ ^⑩ | - | - | - | 23-8 | R56 | 須恵器變転用 |
| 9 | 土鍤 | 1層 | 長さ:39.5、幅12.5、厚さ:1.25、重量:6g | | | | | | R37 | |
| 10 | 木製品 挽物漆器皿 | 5層 | | | (17.2) | (13.8) | 1.1 | | R54 | 漆のみ残存 |

第43図 SK1372土壤出土遺物(2)

うち3層には灰白色火山灰粒が含まれている。

遺物は土師器杯(B II・B V類)・甕(B類)、須恵器杯(II a・III・V類)・甕、平瓦(II c類)、製塙土器、土鍤が出土している。

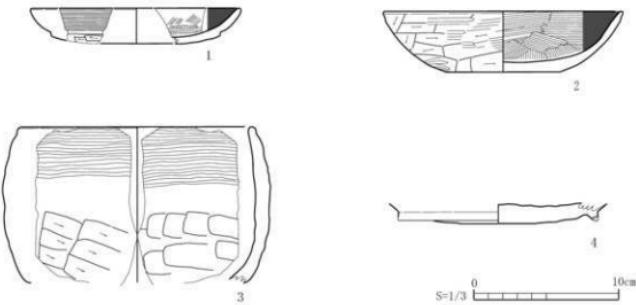
SK1383土壤



| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|--------------|-------------------------------|------------|-----------------|-----------------|------------|----------|----------|--------------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・甕 | SK1380 1層 | ロクロナデ→ヘラナデ・ヘ ラケズリ | ロクロナデ→ヘラナデ | (12.4) 5/24 | (23.3) 19/24 | 35.2 | 22-7 | R43 | |
| 2 | 転用瓶 | SK1380 1層 | タタキ | | (長) 93 | (幅) 103 | (厚) 1.2 | | R100 | 須恵器甕破 片転用 |
| 3 | 須恵器・杯 | SK1382 埋土 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | (13.2) 1/24 | (6.6) 4/24 | 3.8 | | R101 | 底面に墨痕 有り |
| 4 | 須恵器・杯 | SK1382 1層 | ロクロナデ 底部:回転糸切り | ロクロナデ | (13.7) 19/24 | 6.8 24/24 | 42.5 | 22-4 | R4 | |
| 5 | 土鍤 | SK1383 埋土 | 長さ:36.0、幅:16.5、厚さ:16.0、重量:9g | | | | | 22-5 | R39 | |
| 6 | 土鍤 | SK1398 1層 | 長さ:32.0、幅:15.0、厚さ:14.5、重量:10g | | | | | 22-6 | R13 | |
| 7 | 刀子 | SK1374 埋土 | 長さ:48.、幅:15.、厚さ:0.7 | | | | | | R3 | |

第44図 SK1380 土壠他出土遺物

調査区中央付近のIV層上面で発見した。平面形は不整円形で、規模は長径1.15m、短径1m、深さ29cmである。底面は凹凸があり壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は3層に分けられる。1層はブロック状のオリー



単位(cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------------|----|-----------------------------|---------------------|---------------------|--------------|----------|----------|----------------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | |
| 1 | 須恵器・杯 | 1層 | 口縁部：ヨコナデ 体部：底部：ケズリ | ヘラミガキ 黒色処理 | (14.2) 2/24 | - | (2.4) | R81 | |
| 2 | 土師器・杯 | 1層 | 手持ちヘラケズリ→ヘラミ 底部：手持ちヘラケズリ | ヘラミガキ 黒色処理 | (16.2) 9/24 | 7.8 24/24 | 4.2 | R28 | |
| 3 | 土師器・鉢 | 1層 | 口縁部：ヨコナデ 体部：ヘラケズリ | 口縁部：ヨコナデ 体部：ヘラナデ | (15.6) 2/24 | - | - | R83 | 下部にすすぐ 台着 |
| 4 | 須恵器 高台付杯 | 埋土 | ロクロナデ | ロクロナデ | - (13.4) 4/24 | - | - | R34 | 内外面に次ハ 不規あり |

第45図 SK1388土壤出土土器

ア灰色土が主体となる人為的な埋め戻し埋土である。2層～3層は自然堆積土で、2層が炭化物粒を含む灰白色粘質土、3層が黒色粘質土を含む緑灰色土である。

遺物は土師器杯(B II類)・壺(B類)、須恵器杯(V類)・蓋・壺、灰釉陶器段皿が出土している。

SK1388土壤

調査区中央付近、東壁際のIV層上面で発見した。SE1387重複しておりそれよりも古い。平面形は東側が調査区外に延びているため不明である。規模は南北345m以上、東西1.8m以上、深さ1.24mである。断面形は底面付近がくぼみそこから段を形成し、やや開きながら立ち上がる。埋土は3層に分けられる。1層～2層はブロック状のオリーブ灰色土が主体となる人為的埋め戻し土である。3層はオリーブ灰色土が縞状に堆積する自然堆積土である。

遺物は土師器杯・鉢・壺(A類)、須恵器杯・高台付杯・瓶・壺、丸瓦(II類)・平瓦(II B類)が出土している。

SK1398土壤

調査区北西隅のIV層上面で発見した。平面形は不整長方形で、規模は長軸1.3m以上、短軸1m、深さ25cmである。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は3層に分けられる。1層は炭化物粒を含む黒褐色土の自然堆積土である。2層～3層は炭化物粒を多量に含むブロック状のオリーブ灰黄褐色～灰色土が主体となる人為的埋め戻し土である。

遺物は土師器杯(B II類)・壺(B類)、須恵器杯(III類)・瓶・壺が出土している。

SX1392

跡については、柱穴の規模や張り出し部を持つ建物形状であることから該期の遺構として報告することにした。

SB1394 挖立柱建物跡

調査区北端部のIV層上面で検出した東西2間、南北3間の身舎の西側に張り出しが付く南北棟建物跡である。SB1409、SI1395、SK1372と重複し、SB1409よりも古く、SI1395、SK1372よりも新しい。柱間は桁行が東側柱列で南より約2.0m、約1.9m、約2.0m、総長5.9mであり、梁行は北妻で西より約2.2m、約2.2m、総長4.4mである。張り出しへは南妻に合わせて西側柱に設けられ、身舎からの出は約2.2m、南北は約2.4mである。方向は南妻で測ると東で約8度南に偏している。柱穴は直径15～40cmの円形もしくは梢円形あるいは一辺35～50cmの方形で、深さは15～25cmである。掘方埋土は黒褐色粘質土ブロックを含む灰黄褐色砂質土である。柱痕跡は3基で確認し、直径20cmの円形である。柱抜取り穴は5基で確認した。

遺物は土師器杯(B類)・甕(A・B類)、須恵器杯(Ⅲ類)、土錘3点、焼粘土塊が出土している。

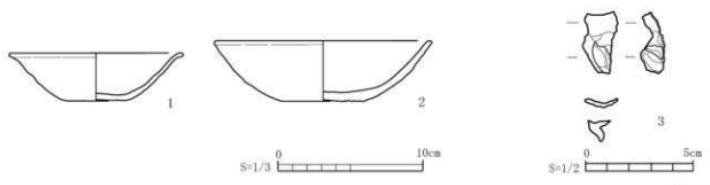
SB1409 挖立柱建物跡

調査区北端部のIV層上面で検出した東西1間、南北1間の建物跡である。SB1394、SI1395と重複し、これらよりも新しい。柱間は東側の柱列で約3.3m、北側の柱列で3.3mである。方向は南側の柱列で測ると東で約3度北に偏している。柱穴は一辺30～40cmの隅丸方形で、深さは30～50cmである。掘方埋土はオリーブ色砂質土を主体とする。柱痕跡は1基で確認し、直径10cmの円形である。柱抜取り穴は3基で確認した。

遺物は土師器杯(B類)・甕(B類)が出土している。

遺構外出土の遺物

図示できたものはI層出土の須恵系土器杯2点、II層出土の銅製品1点である。



第51図 遺構外出土遺物

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録番号 | 備考 | 単位(cm) |
|----|------------|-----|--------------------|-------|-----------------|----------------|-----|----------|------|----|--------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | | |
| 1 | 須恵系土器 杯 | I層 | 口クロナデ 底部：回転糸切り | ロクロナデ | (11.6) 10/24 | 4.8 24/24 | 3.3 | | R46 | | |
| 2 | 須恵系土器 杯 | I層 | ロクロナデ 底部：回転糸切り | ロクロナデ | (15.0) 11/24 | (5.6) 13/24 | 4.2 | | R47 | | |
| 3 | 銅製品 | II層 | 長さ：28、幅：1.5、厚さ：1.1 | | | | | 24-12 | R4 | | |

IV 考察

1 古墳時代の遺物と遺構

(1) 遺物について

古墳時代前期の遺構は前述のとおりV層、VI1層、VI4層の各上面で検出した。また、V層～VI4層も遺物を包含する。ここでは下層から上層へと遺物の検討を行っていくが個体数が少ないので年代を決定しうる資料を中心にみていくことにする。検討にあたっては、丹羽茂氏、次山淳氏、辻秀人氏の塩釜式土器編年および青山博樹氏の小型丸底鉢の編年(青山1997)と対比させその編年の位置を考えてみる。なお、各氏の土器編年の対応関係は以下の表のとおりである。

| 辻(1993) | I-1 | I-2 | II-1 | II-2 | III-1 | III-2 | III-3 | III-4 |
|----------|-----|-----|------|------|-------|-------|-------|-------|
| 次山(1992) | | | 1 | | 2 | 3 | 4 | 5 6 |
| 丹羽(1985) | | | 1 | | II A | | II B | III |

*青山は小型丸底鉢について精製段階と粗製段階に2分し、それぞれを辻のⅢ期前半とⅢ期後半に対応させている。

第1表 塩釜式土器編年の対応関係

最下層(VI4層)出土の鉢(第16図1)は典型的ないわゆる小型丸底鉢とは異なり屈曲する段(くびれ)が底部近くに位置しそこから外傾して口縁部に移行する器形である。底部はややくぼむ平底を呈する。このような器形に類似する資料としては、本例よりもや大ぶりであるが、辻編年のⅡ-2期に位置付けられている色麻古墳群の第11号住居跡出土の鉢があげられる(古川1983)。第16図3の鉢は小型丸底鉢と比較して大型の規格性を持つ。この器種は辻の分類による鉢Dに該当するものと思われ、Ⅱ-1～Ⅲ-2期に存在するとされている。このうち本例に形態的に最も類似する資料としては、Ⅱ-1期に位置付けられている二本松遺跡土器集中地点の一括土器に認められる(小山田1985)。ただし、調整においては二本松例よりも本例が粗雑なようである。

SI1406周溝埋土出土の壺(第14図3)は口唇端部に面を持ち頸部に刻目突帯を有する。辻よればこのような突帯をめぐらす例はⅡ期に確認例が多くⅢ期以降は未確認であるとしている。しかしながら、Ⅲ-3期の佐沼城跡SD105溝跡では突帯が付く壺が出土している(佐久間1995)のでⅢ期以降も存続しているものと考えられる。SX1405出土の小型丸底鉢(第14図9)は精良な胎土で丁寧なミガキ調整が施される。底部は丸底で、口縁部はシャープな段を持って立ち上がる。青山の精製段階に比定される。

VI2層出土の高杯(第17図1)は口縁部が欠損しているが浅めの杯部を有していたと思われる。脚部は上部が中実で下部が円錐状に開き円錐台状部の中央付近に3孔の円窓がある。内外面とも最終調整は横位軽いナデであるが、脚部には縱方向のミガキの痕跡が観察される。このような特徴を持つ高杯は清水遺跡IV層出土土器に認められ(丹羽ほか1981)、辻編年のⅢ-2期に位置付けられている。第17図2は中実棒状の脚部を持つ高杯であり、下部では「八」状に開くものと思われる。このタイプの高杯は辻編年のⅢ-4期に位置付けられている。以上の高杯は同一層位から出土しており、近年、佐沼城跡SD105溝跡出土の一括資料の検討から丹羽、次山、辻が分類した各段階の特徴を示す高杯が単純に時間差の関係でなく種々の器種が同一時期に存在するとの指摘(佐久間1995、井上2006)に符合する。第17図3の小型丸底鉢は下半の椀部が小型でありそこから強く屈曲して口縁部に至る。底部には中央に円形のくぼみを持つ。調整は口縁部内外面ともヨコナデ後縦方向のヘラミガキ、椀部が内外面ともヘラナデである。口縁部径と体部径の差が著しいことや口縁部の発達がみられることから青山の精製段階に比定される。辻編年ではⅢ-2期に位置付けられている清水遺跡IV層出土土器の鉢に類似する。

VI 1層出土の高杯(第18図1)は中実棒状の脚部片である。棒状部直下の裾部には円窓が3ヶ所認められる。裾部は屈曲しつつ開くものと推定される。外面は丁寧な縱方向のヘラミガキ調整である。本例は中実棒状の脚部をもつ高杯を集成した高橋和氏の分類によればII a類に該当し、該種として福島県朝日長者遺跡102号住居出土土器をあげている(高橋1985)。この円窓を持つタイプは円窓を持たないII b類に先行するものとされており、前期中葉頃の時期としている。第18図2の鉢は法量、形状からみて辻の分類による鉢Aに該当する。II期～III-1期に確認されているとするが、III-2期以降も少量存続する可能性も示唆している。辻の示した該種の変遷をみると、II期では口縁部が屈曲して内湾しながら立ち上がるが、III-1期になると外反気味になる変化が認められる。したがって、本例は後者の特徴を有することからIII-1期以降の時期とみられる。

V層出土の鉢(第19図1)は体部が内湾しながら立ち上がり口縁部は屈曲しながら外反する。底部は小さく平底を呈する。調整は内・外面ともハケメ後ミガキである。辻の分類による鉢Cに相当し、II-2、III-2期で確認されるという。伊治城跡SD261溝跡出土土器群(佐藤1992)は辻のIII-3期に位置付けられているが、この中に同様の形式組列下にある鉢が確認できるので、同段階までは組成しているとみられる。また、多賀城市内では山王遺跡SI1232住居跡で同タイプの鉢が出土しており、III-1～3期に位置付けられている(武田2006)。第19図2は体部が算盤玉状をなし頭部で「く」の字形に外反する鉢(壺)である。類例は下草古城跡SX1000第10地点の壺C2類[丹羽：II A段階](天野ほか1994)や色麻古墳群第11号住居跡[辻：II-2、丹羽：II A段階]の広口で口縁部の短い壺などがある。第19図3はこれまでみてきた小型丸底鉢と比較して器壁が厚く(特に底部)、下半部の調整もヘラケズリ後ナデ調整であるがケズリの凹凸が残存している。底部は周辺に薄く粘土紐を張り付け後ナデつぶして円形のくぼみ底を作出する。青山の粗製段階に比定される。次山は小型丸底鉢の最終段階に底部を平底風にヘラケズリ調整する留沼遺跡の土器をあげており、辻もこの土器をIII-4期に位置付けている。したがって本例は最新段階までは下らなものとみられることからIII-3期としておきたい。

以上、今回出土した土師器を主に辻編年と対比させて検討してきたが、II期～III-3期の時間幅を持つことが明らかとなった。土器のまとまりと層序を勘案すると①VI 4層→②[SI1406周溝・SX1405]→③VI 2・VI 1層→④V層の4段階で推移しており、これまで提示されている土器編年との整合性もおおむねそれでいるものと考えられる。したがって、ここでは①：II期、②：III-1期、③：III-2期、④：III-3期という辻編年との併行関係を想定しておきたい。

さて、前述のとおり佐沼城の報告において提起された辻のIII-2期以降の高杯の変遷については、それぞれの細別形式における組列が問題となる。VI 2層出土資料は個体数が少ないので慎重であらねばならないが、脚部の上部が円柱状でその下に中空を持ち裾部が円錐台状に開くもの(辻分類F)と柱状部全体がほぼ中実で裾部は屈曲して開くもの(辻分類H・I)が共伴しており、後者の出現がIII-2期にあると考えておく。

(2) 遺構について

VI 4層上面ではSI1406竪穴住居跡、SX1404・1405焼成遺構を発見した。その時期については土器の検討から辻のIII-1期に位置付けられた。本住居跡は住居本体とそれを取り囲む周溝から構成されるいわゆる「周溝をもつ建物」とみられる。このような構造の住居跡は北陸や関東地方の自然堤防や沖積地において発見例が多く地下水位の高い土壤環境に適した形態と考えられている。多賀城市内では山王遺跡群地区

のSX2818・2823方形周溝墓、SB3879掘立柱建物跡とされた遺構(村田ほか1998)について飯島義雄氏によって検討がなされ、「周溝を持つ建物」として理解すべきであるとしている(飯島2008)。本住居跡は住居本体に掘方周溝を持つ町地区のものはこれを持たないなど構造上の相違点がある。また、年代的にも本住居跡よりも時期が下る。本地域においてこのような住居形態が一過性のものであったのか繼続性をもつものなのか事例が少なく検討できないが、少なくともこの上層で検出したSI1400・1401堅穴住居跡は普遍的にみられる住居形態である。いずれにせよ他の地域から持ち込まれた建築技法と考えられ、伝播経路を含めて今後の課題としたい。

VI1層上面ではSI1400・1401堅穴住居跡、SX1403焼成遺構を発見した。その時期については住居跡からの出土遺物が少ないため十分な検討ができないが、その上下層の年代観から辻編年のⅢ-2～Ⅲ-3期に位置付けられる。

遺構の変遷をまとめると、畦畔等の遺構は検出されなかったがプラントオバール分析の結果、IV1、IV4層が水田耕作土と指摘されている。したがって、このことを含めた土地利用の変遷は、生産域(水田耕作地)→居住域→生産域(水田耕作地)→居住域と考えておく。

SX1402河川跡については、4期(A～E)の変遷があり、A期からは埴釜式土器、E期からは埴釜式と南小泉式土器が出土した。本河川跡はV層上面で検出されることから、4世紀の終末ごろに形成され5世紀には埋没したものと考えられる。なお、A期の埴釜式土器は北岸付近でまとまって出土する傾向があり、北側に位置する4世紀の遺構群からもたらされた可能性が高い。市内では北東に隣接する八幡地区において大規模な河川跡が発見されており、一連の主要な河川と考えられる。

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

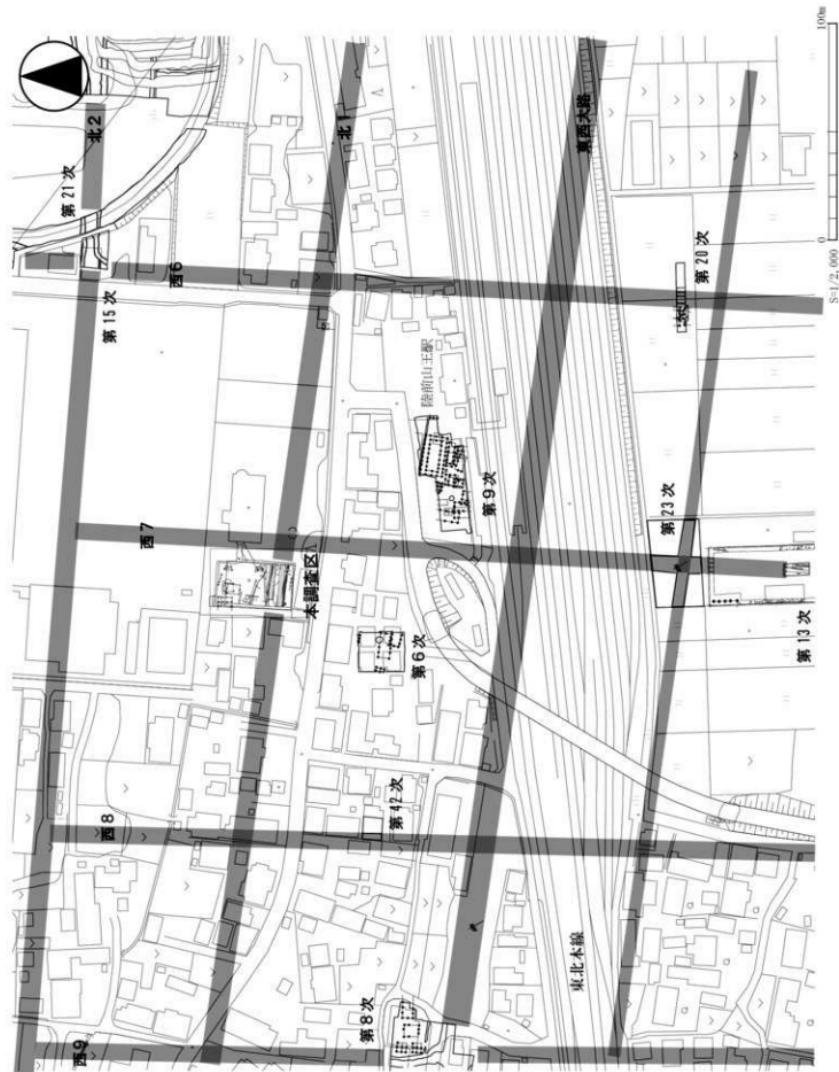
(1) 奈良時代

今回の調査で奈良時代の遺構とみられるのはSK1388土壙1基である。第45図1は非クロ調整の土師器杯で、底部が丸底で口縁が内湾するいわゆる有段丸底杯である。口縁部と体部の境に沈線状の段を有し、口縁部がヨコナデ、体部から底部がヘラケズリ調整されている。このような杯は7世紀中頃～8世紀後半の時期に一般的にみられるものである。第45図2も非クロ調整の土師器杯で、底部が平底で口縁部は直線的に立ち上がる。調整はほぼ全面をヘラケズリしたのち部分的にヘラミガキが施される。宮城県中部から南部の6～8世紀の土器変遷をまとめた村田晃一氏の編年によれば(村田2007)、このタイプの器種は8世紀中頃～後半期に盛行し、8世紀末～9世紀初頭には姿を消すとされている。第45図4は須恵器高台付杯の底部片で、底面が高台部より下に張り出す特徴を持つ。これに類似する資料は硯沢窯跡のB3号窯跡出土のI B1類に認められる(宮城県教委1987)。硯沢窯跡出土土器の年代は總体として8世紀中葉頃とされている。集落跡出土の資料としては郷楽遺跡第107号住居跡の高台付杯に同様のものがあり、年代は8世紀中葉～後半としている(菊地ほか1990)。以上、各々の土器の年代観をまとめてみると、おおむね8世紀中葉～後半に位置付けられる。

(2) 平安時代

道路跡と河川跡について

調査区南半で検出したSX1407北1東西道路跡は側溝で4時期の変遷(A→E)を確認した。このうちC期の側溝には10世紀前葉に降下した灰白色火山灰の再堆積層が認められることから、C・D期について



第52図 本調査区と周辺の方格地割

それ以降の時期とすることができます。一方、出土遺物からみると、10世紀前葉前後に出現する須恵系土器がC・D期の埋土に含まれていることから灰白色火山灰との関係も矛盾しない。A・B期は出土遺物が微量で詳細な検討はできないが、A期で土師器杯B II類1点、B期で土師器杯B II類2点、B V類3点、須恵器杯III類6点・V類2点の構成をとる。須恵系土器は含まれていない。したがって、本道路跡の上限年代は10世紀前葉以前の9世紀代と考えられる。次に道路跡より古いSX1397河川跡出土土器について検討してみる。これも出土量は微量であるが、土師器杯B II・B V類、甕B類、須恵器杯III・V類が確認されている。この他に灰釉陶器碗が1点出土している。高台部は外側に張り出したやや高めの角高台で、尾野善裕氏の編年による第3段階(860年～890年)に比定される(尾野2008 註1)。

さて、以上のことから北1東西道路跡の構築年代は9世紀後半頃と考えられる。これまでの調査で北1東西道路跡が検出された例としては、市教委の第19次調査(石本1992)、県教委による多賀前地区の調査(菅原1996b)がある。前者では9世紀代、後者では9世紀前半に構築年代が求められている。また、鈴木孝行氏は9世紀前葉頃には東西大路を挟んで南北1区画ずつの方格地割が成立すると考察している(鈴木2006)。今回の調査成果を踏まえれば、9世紀前葉まで道路の造成時期がさかのばるものではないことが明らかとなった。したがって、9世紀に入ると一斉に北1道路が造られたものではなく段階的に順次造成されていったものと推察される。

その他の遺構について

SK1372土壤は1層～2層にかけて遺物が集中して出土した。土器類が多いが別章で報告する漆紙文書も比較的まとまった数が出土している。土師器杯の内訳は38点中B I類が6点(16%)、B II類が11点(29%)、B V類が21点(55%)である。底径／口径比では図示したものでみた場合、0.42～0.5で平均0.47、器高／口径比では0.32～0.42、平均0.36である。須恵器杯は32点中I類が1点(3%)、II類が3点(10%)、III類が18点(56%)、V類が10点(31%)となる。底径／口径比では図示したものが2点と少ないので、0.45と0.47、器高／口径比では0.27～0.34である。次にこれらを多賀城跡出土資料と比較してみると、土師器杯B V類が全体の5割を占める例としは、9世紀第3四半期の大烟SE2102井戸跡(真山・柳澤1992)、五万崎SK2272(丹羽1995)や9世紀第4四半期の鴻の池10層(真山・柳澤1992)があげられる。底径／口径比でみた場合、鴻の池10層が0.36～0.46の値であり本土壙の方がやや底径の比率が大きく古相を呈する。近似する数値はSK2272の0.48前後に集中する傾向に近い。須恵器杯は構成比でみた場合、9世紀中葉の大烟SK2167(真山・柳澤1993)に近似し、底径／口径比では、9世紀中葉～第3四半期がおおよそ0.5前後の数値を示している。以上をまとめると、本土壙出土土器の年代は9世紀中葉～第3四半期に収まるものと考えられる。

この他の土壤出土土器についてはいずれも破片で量的にも少ないため十分に検討できないが、土師器杯・甕B類、須恵器杯III・V類が確認できることから8世紀末葉に上限年代が求められる(吾妻2004)。そしていずれにも須恵系土器が含まれていないことを考慮すればおおむね9世紀代に位置付けられる。

SII395竪穴住居跡は重複関係からSK1372土壤より古いことが確認されているので9世紀中葉より古い時期である。また、出土遺物には土師器杯・甕B類が含まれているので上限年代は8世紀末葉である。

(註1) 尾野氏によれば三ヶ月高台が主流になる時期のものであり、生産地は猿投窯以外の東海地方製品の可能性があるとの御教示をいただいた。

SE1376井戸跡の井戸側抜取穴埋土には灰白色火山灰の再堆積層が認められることから、10世紀前葉以降には埋没していたことがわかる。埋土中から多量の須恵系土器が出土していることとも矛盾しない。

井戸側内・掘方埋土には全く須恵系土器が確認できず、土師器杯はB I II・類とB V類がほぼ等量で、須恵器杯ではIII類とV類の組み合せになることから、9世紀中葉～後半に機能していたものとしておく。

SE1375井戸跡はSE1376を壊して造られていることから10世紀前葉以降の時期に機能していたと思われるが、下限年代を示す資料が出土していないため詳細は不明である。

SE1387井戸跡はSE1376よりも古く、奈良時代のSK1388よりも新しい。遺物は少量であるが土師器杯・甕B類が出土している。これらのことから8世紀末～9世紀前半の年代が考えられる。

掘立柱建物跡の年代はいずれからも量は少ないが土師器杯・甕B類が出土していることから8世紀末葉以降としておく。

SD1407北1東西道路跡北側溝の北側にはほぼ平行して走る溝跡3条は、SD1371→SD1381→SD1384→SD1389の重複関係が把握されている。したがって、いずれも道路廃絶後の時期となる。SD1378・1379は重複関係にあり前者が古い。SD1379出土の土師器杯はB I・II類と甕B類、須恵器杯はI・III・V類で構成されている。これらの様相は9世紀前半とみられる。SD1378は土師器杯B V類が出土していることから8世紀後葉以降である。

V まとめ

- (1)弥生時代では現地表から約4m下で弥生時代中期中葉期の黒色粘土層を検出した。今回の調査では遺構・遺物とも発見できなかったが、周辺の調査事例では、標高1m前後の層準において水田や遺物包含層が確認されている。今回この土壤について放射性炭素年代測定(AMS法)を実施したところ、2040±40年BP(BC170～AD50年)の年代値が得られた。
- (2)古墳時代前期の遺構は堅穴住居跡、焼成遺構が重層して検出され、土地利用の変遷が長期に及ぶことが明らかとなった。また、北陸や関東地方で発見例が多い「周溝を持つ建物」の存在を確認した。
- (3)古代においては、本調査区が方格地割の北2西8区の南東隅付近にあたり、北1東西道路跡、西7南北道路跡の存在が想定されていた。前者はほぼ想定通りの位置で確認したが、後者は発見できなかった(註2)。遺構の密度は比較的希薄で、平安期では井戸、掘立柱建物、堅穴住居、廐窓穴で構成されていた。廐窓穴からは漆文書と漆付着土器が出土したことから、この地割り内には漆工房が存在したと考えられる。

(註2)平成22年3月に実施した付帯工事に係る調査において、調査区の約10m東側で西7南北道路を確認したが、時間的制約から本書には収録できなかった。

引用・参考文献

- 青山博樹 「小牛田町山前遺跡出土の塗釜式土器とラウンドスクレーパー—北辺の古墳時代社会と縄文文化」宮城考古学第1号 1999

- 青山博樹 「東北南部における古墳編年と土器編年の対応についての予察」『福島考古』第38号 福島考古学会 1997
- 吾妻俊典 「多賀城とその周辺におけるロクロ土器類の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会 2004
- 飯島義雄 「宮城県仙台平野における古墳時代前期の「周溝を持つ建物」の認識とその意義」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会 2008
- 井上雅孝 「岩手県における古墳時代前期の土器様相」『岩手考古学』第18号 2006
- 天野順陽ほか 「下草古墳群はか」宮城県文化調査報告書第160集 1994
- 尾野善裕 「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集 2008
- 後藤秀一・村田晃一 「山王遺跡八幡地区の調査—県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ—」宮城県文化財調査報告書第162集 1994
- 佐久間光平・小村田達也 「佐沼城跡」追町文化財調査報告書第2集 1995
- 佐藤則之 「伊治城跡」第18次調査『築館町文化財調査報告書第5集』1992
- 佐藤則之・佐藤恵幸ほか 「山王遺跡V第一分冊〈八幡地区〉—」「山王遺跡V—第一2分冊〈伏石地区・考察〉—」宮城県文化財調査報告書第174集 宮城県教育委員会 1997
- 石本敬 「山王遺跡第19次調査在「山王遺跡はか」発掘調査報告書」 多賀城市文化財調査報告書第34集
- 菅原弘樹ほか 「山王遺跡II—多賀前地区構造編—」宮城県文化財調査報告書第167集 1995
- 菅原弘樹ほか 「山王遺跡III—多賀前地区遺物編—」宮城県文化財調査報告書第170集 1996a
- 菅原弘樹・佐藤恵幸ほか 「山王遺跡IV—多賀前地区考察編—」宮城県文化財調査報告書第171集 1996b
- 鈴木孝行 「多賀城外の方格地割」第32回古代城査官衙道跡検討会資料集 2004
- 高橋和 「東北地方南部の古墳時代前期高坏に関する一視点—中実棒状部を持つ脚部形態について—」『法政史論』第13号 1985
- 武田健市 「山王遺跡 第58次調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第89集 2006
- 丹羽茂ほか 「清水遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書V『宮城県文化財調査報告書第77集』1981
- 丹羽茂 「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集 1983
- 丹羽茂 「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚」宮城県文化調査報告書第104集 1985
- 丹羽茂 「現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究年報1994 多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所 1995
- 千葉孝弥・鈴木孝行 「山王遺跡I—仙塙道路建設に係る発掘調査報告書—」1997
- 千葉孝弥ほか 「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書I—」多賀城市文化財調査報告書第60集 2001
- 千葉孝弥ほか 「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II—」多賀城市文化財調査報告書第67集 2003
- 千葉孝弥ほか 「市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III—」多賀城市文化財調査報告書第75集 2004
- 次山淳 「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 1992
- 辻秀人 「東北南部における古墳出現期の土器編年—その2—」東北学院大学論集第27号 1995
- 手塚均 「留沼遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書III『宮城県文化財調査報告書第65集』1980
- 宮城県教育委員会 「硯沢・大沢塙跡はか」宮城県文化財調査報告書第116集 1987
- 平塚幸人 「仙台平野の塩釜式土器における模型丸底鉢について」『仙台市富澤遺跡保存館研究報告4』 2001
- 古川一明 「色麻古墳群」『宮城県宮園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第95集 1983
- 小山田正男 「二本松遺跡 河原田遺跡」「国宮みちのく杜の湖畔公園関係遺跡発掘調査」宮城県文化財調査報告書第112集 1985
- 菊地逸夫・庄子敦 「利府町郷業遺跡II」宮城文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集 1990
- 村田晃一 「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』 1994
- 村田晃一ほか 「山王遺跡町地区の調査—県道泉塩釜線関連調査報告書II—」宮城県文化財調査報告書第175集 1998
- 村田晃一 「東北・北海道における6~8世紀の土器変遷と地域の相互関係—宮城県中部から南部—」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部 2007
- 真山悟・柳澤和明 「第60・61・62・63次調査」『宮城県多情跡調査研究年報1991 多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所 1992
- 真山悟・柳澤和明 「第62・63次調査」『宮城県多賀城跡調査研究年報1992 多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所 1993
- 柳澤和明・白崎恵介 「第68次調査」『宮城県多賀城跡調査研究年報1997 多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所 1998
- 柳澤和明 「市川橋遺跡の調査 県道「泉~塩釜線」関連調査報告書VII』宮城県文化財調査報告書第218集 2009

附章1 多賀城市山王遺跡第68次調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

I プラント・オパール分析

1 はじめに

山王遺跡は弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。これまでに実施された発掘調査では、弥生時代中期および古墳時代前期の水田跡、古墳時代中期～後期の集落跡、奈良・平安時代の建物跡や道路跡、鎌倉・室町時代の武士の屋敷跡、江戸時代の堀跡や井戸跡などが検出されている。

ここでは、第68次調査における稻作跡の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を実施した。

2 試料

分析試料は、古墳時代前期のSI1400豎穴住居跡埋土1層（試料No.1）、同掘方埋土6層（試料No.2）、SI1401豎穴住居跡埋土1層（試料No.3）と基本層VI1層（試料No.4）、VI3層（試料No.9）VI4層（試料No.5）及び、弥生時代と推定されるIX層（試料No.6）、XⅢ1層（試料No.7）、XⅢ2層（試料No.8）の9点である。試料はいざれも調査担当者により採取され、当社に送付されたものである。

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、ガラスピーブ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピーブを約0.02g 添加
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁵g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は12.4、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。

4 分析結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケア科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針も確認された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、

| 検出密度(単位: × 100 個/g) | | | | | | | | | | |
|---|--|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 分類群(和名・学名) \ 層位 | | No1 | No2 | No3 | No4 | No5 | No6 | No7 | No8 | No9 |
| イネ科 | Gramineae (Grasses) | | | | | | | | | |
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 48 | 48 | 36 | 32 | | | 12 | 17 | 6 |
| ヒエ属型 | <i>Echinochloa type</i> | | | 6 | 6 | 6 | | 37 | 13 | |
| キビ属型 | <i>Paniceae type</i> | | | | | | | | | |
| ヨシ属 | <i>Phragmites</i> | 18 | | 18 | 12 | 26 | 25 | 37 | 77 | 11 |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus type</i> | 18 | 6 | 12 | 18 | 26 | 25 | 93 | 64 | 23 |
| シバ属 | <i>Zoysia</i> | 6 | | | | | | | | |
| タケ科 | Bambusoideae (Bamboo) | | | | | | | | | |
| メダケ節型 | <i>Pleiothrix sect. Nipponocalamus</i> | 18 | 6 | 6 | 6 | 13 | 6 | 6 | 19 | 17 |
| ネザサ節型 | <i>Pleiothrix sect. Nezasa</i> | 18 | 12 | 18 | 6 | 13 | 12 | 6 | 19 | 6 |
| チマキザサ節型 | <i>Sasa sect. Sasa etc.</i> | 36 | 6 | 30 | 18 | 26 | 12 | 56 | 6 | 45 |
| ミヤコザサ節型 | <i>Sasa sect. Crassinodi</i> | 12 | | 6 | 6 | 6 | 6 | 12 | 6 | 11 |
| その他 | Others | 18 | | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 17 |
| 未分類等 | Unknown | 233 | 133 | 172 | 172 | 194 | 181 | 242 | 327 | 164 |
| (海綿骨針) | Sponge | 12 | | 12 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 |
| プラント・オーバル乾枚 | Total | 431 | 163 | 322 | 280 | 348 | 273 | 507 | 537 | 317 |
| おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² ·cm) | | | | | | | | | | |
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 1.64 | 1.46 | 0.95 | 1.06 | | | | | 0.44 |
| ヒエ属型 | <i>Echinochloa type</i> | | | | | | | | | 0.48 |
| ヨシ属 | <i>Phragmites</i> | 1.32 | | 1.17 | 0.68 | 1.83 | 0.84 | 1.20 | 2.65 | 0.62 |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus type</i> | 0.26 | 0.08 | 0.15 | 0.20 | 0.36 | 0.17 | 0.59 | 0.43 | 0.25 |
| メダケ節型 | <i>Pleiothrix sect. Nipponocalamus</i> | 0.24 | 0.08 | 0.07 | 0.06 | 0.17 | 0.04 | 0.04 | 0.12 | 0.17 |
| ネザサ節型 | <i>Pleiothrix sect. Nezasa</i> | 0.10 | 0.06 | 0.09 | 0.03 | 0.07 | 0.03 | 0.02 | 0.05 | 0.02 |
| チマキザサ節型 | <i>Sasa sect. Sasa etc.</i> | 0.31 | 0.05 | 0.23 | 0.12 | 0.22 | 0.05 | 0.21 | 0.03 | 0.30 |
| ミヤコザサ節型 | <i>Sasa sect. Crassinodi</i> | 0.04 | | 0.02 | 0.02 | 0.02 | 0.10 | 0.02 | 0.01 | 0.03 |

表1 多賀城市山王遺跡第68次調査のプラント・オーバル分析結果

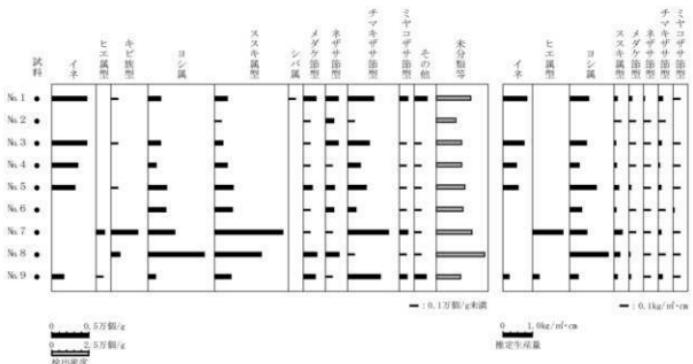


図1 山王遺跡第68次調査のプラント・オーバル分析結果

図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オーバルの検出状況を記す。

イネは試料No1、試料No3、試料No4、試料No5、試料No9で検出されている。プラント・オーバル密度は試料No1、試料No3、試料No4、試料No5で高い値である。ヒエ属型は試料No7と試料No9で検出されているが低い密度である。キビ属型は試料No1、試料No3、試料No5、試料No7、試料No8で検出されている。試料No7では比較的高い密度である。ヨシ属は試料No2を除く各試料で検出されている。このうち、試料No8では非常に高い密度であり、試料No7でも高い密度である。ススキ属型はすべての試料で検出されている。試

料No7と試料No8では非常に高い密度である。シバ属は試料No1のみで検出されているが低い密度である。メダケ節型、ネザサ節型およびチマキザサ節型の各分類群はすべての試料で、ミヤコザサ節型は試料No2を除く各試料で検出されている。プラント・オパール密度はいずれも低い値である。なお、試料No2を除く各試料からは低密度であるが海绵骨針が検出されている。

5 考察

古墳時代前期の堆積層（試料No4、試料No5）では、両試料からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度はそれぞれ3,600個/gと3,200個/gであり、稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gを超過している。のことから、当該層において稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。一方、同時期の試料No9では、イネのプラント・オパールは検出されたものの、密度は1,700個/gとやや低い値である。したがって、本試料が採取された地点において稲作が行われていた可能性は考えられるものの、近傍が耕作地でありそこからプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。仮に当該層で稲作が行われていたとするならば、プラント・オパール密度が低いことの要因としては、1) 耕作期間（稲作が行われた年数）が非常に短かった、2) 土層の堆積速度が速かった、3) 稲の生産性が低かった、4) 土壌の容積作用等でプラント・オパールが風化をうけ、未成熟のものが分解された、5) 稲葉の多くが耕作地から持ち出されていた、6) 洪水等で耕作土が流失した、などが考えられる。

なお、古墳時代前期の堅穴住居跡廃絶後の住居内堆積層（試料No1）や住居構築時の掘方埋土（試料No3）からもイネのプラント・オパールが4,800個/gの高密度で検出された。このことについては、上述のように堅穴住居の下位が水田耕作層と考えられることから、住居構築の際に下位の水田層まで掘り込まれた結果、耕作土が混入したことによるものと思われる。

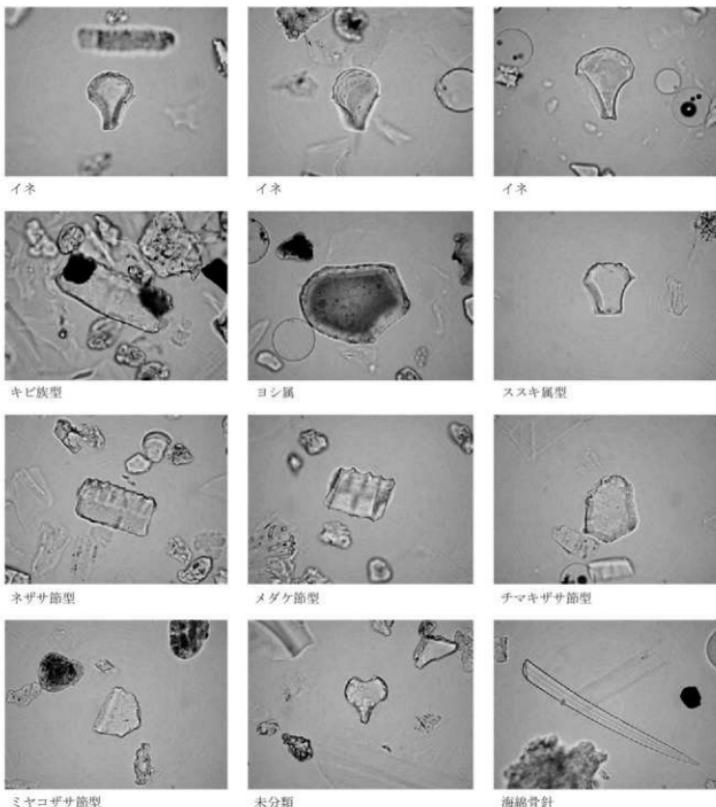
イネ以外の分類群では、キビ族型が試料No7で、ヨシ属とスキ属型が試料No7と試料No8で、チマキザサ節型が試料No1、試料No3、試料No7および試料No9で高い密度で検出されている。推定生産量（表1）をみてみると、すべての試料でヨシ属が優勢である。こうしたことから、弥生時代～古墳時代前期の調査地はいずれの時期も比較的湿った環境であったと推定される。なお、試料No7ではヒエ属型およびヒエ属型類似のキビ族型が比較的多く検出されたことから、ここにヒエ属およびその他のキビ族が生育していた可能性が示唆される。

6まとめ

山王遺跡第68次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、古墳時代前期に堆積した基本層（試料No4、試料No5）においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出され、ここで稲作が営まれていた可能性が高いことが示唆された。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亞科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物図報告, 31, p.70-83
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社, p.189-213
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20, p.81-92
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29
藤原宏志（1998）稲作の起源を探る。岩波新書



プランツ・オパールの顕微鏡写真

— 50 μ m

II 放射性炭素年代測定

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の¹⁴C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により¹⁴C年代から曆年代に較正する必要がある。

ここでは、山王遺跡第68次調査における土層堆積年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を実施した。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。

2 試料と方法

測定試料は、弥生時代物と推定される土層より採取された堆積物(試料No.6, No.7)の2点である。

加速器質量分析(Accelerator Mass Spectrometry: AMS)法による放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理(酸処理)を行った。

1) 蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

2) 塩酸(HCl)により炭酸塩を除去後

3) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ベンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてブレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表1にまとめた。

| 試料名 | 対象物 | 種類 | 前処理・調整 | 測定法 |
|------|----------|-----|--------|-----|
| No.6 | 弥生時代の堆積土 | 堆積物 | 酸洗浄 | AMS |
| No.7 | 弥生時代の堆積土 | 堆積物 | 酸洗浄 | AMS |

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry)は加速器質量分析法

表1 測定試料及び処理

3 結果

年代測定結果を表2に示す。

| 試料名 | 測定No (Beta) | ¹⁴ C 年代 ⁽¹⁾ (年 BP) | ¹⁴ C ⁽²⁾ (%) | 補正 ¹⁴ C 年代 ⁽³⁾ (年 BP) | 曆年代(西暦) ⁽⁴⁾ |
|------|----------------|---|---------------------------------------|--|--|
| No.6 | 262373 | 1940 ± 40 | -243 | 1950 ± 40 | 交点: cal AD 60 1 σ : cal AD 10 ~ 80 2 σ : cal BC 40 ~ AD 130 |
| No.7 | 262374 | 1970 ± 40 | -208 | 2040 ± 40 | 交点: cal BC 40 1 σ : cal BC 90 ~ AD 10 2 σ : cal BC 170 ~ AD 50 |

表2 測定結果

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えて算出した年代。

4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68% 確率)^{レフテ} と 2σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに曆年代較正を行った結果、試料 No.6 では 1950 ± 40 年 BP (2σ の曆年代で BC 40 ~ AD 130 年)、試料 No.7 では 2040 ± 40 年 BP (同じく BC 170 ~ AD 50 年) の年代値が得られた。

文献

- Paula J Reimer et al. (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26.0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058
- 尾崎大真 (2005) INTCAL98 から IntCal04 へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア No.3—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—, p.14-15
- 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院。p.1-36



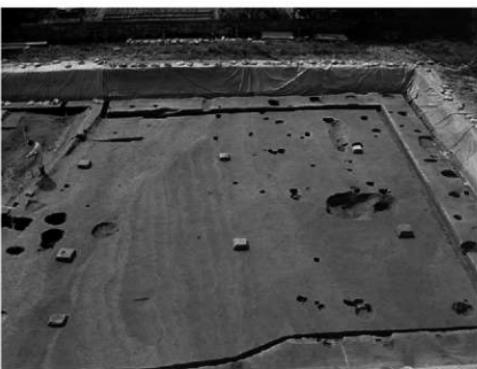
1 調査地より多賀城跡を望む（南西より）



2 調査地より仙台方面を望む（東より）



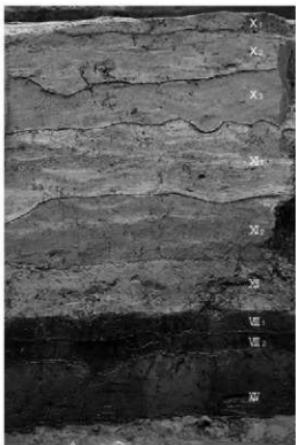
調査区全景(古代) (上空より)



1 V層上面、SX1402河川跡検出状況
(西より)



2 SX1402河川跡土層断面(北岸付近)



3 基本土層断面 (X₁ ~ X₁₄層)



4 弥生時代調査区調査状況(北東より)



1 SI1400竪穴住居跡
(西より)



2 SI1400竪穴住居跡土層断面
(南より)



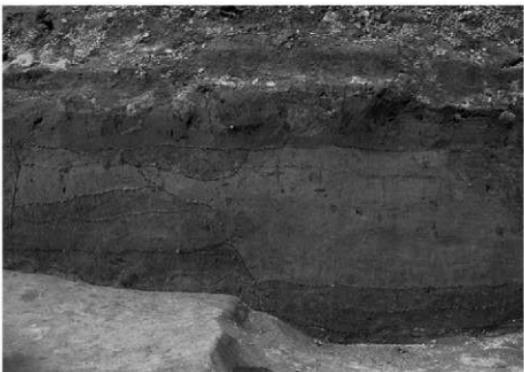
3 SI1400竪穴住居跡 PI 半截
状況 (西より)



1 古墳時代前期遺構全景
(南東より)



2 SI1401 積穴住居跡
(北東より)



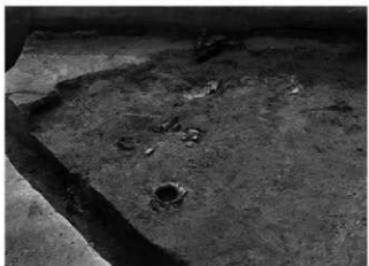
3 SI1401 積穴住居跡土層断面
(南より)



1 SI1406住居跡全景
(北東より)



2 SI1406住居本体
(南東より)



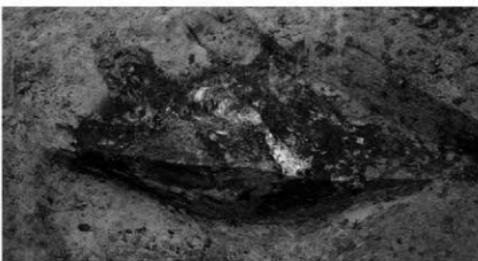
3 SI1406周溝遺物出土状況



4 SI1406周溝土層断面



1 SX1399発掘状況（西より）



2 SX1403 半截状況（南より）



3 SX1404 炭層検出状況（南より）



5 SX1405 炭層検出状況（西より）



4 SX1404 土層断面（東より）



6 SX1405 半截状況（南より）



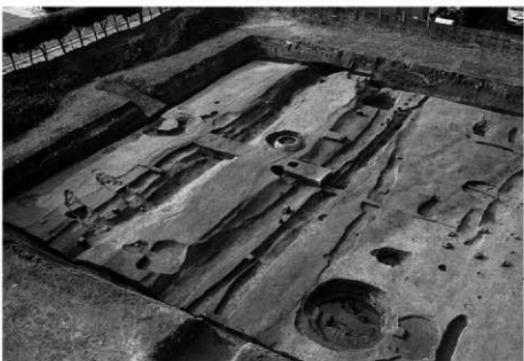
1 SX1397 河川跡完掘状況 (南西より)



2 SX1397 河川跡土層断面 (南西より)



1 SX1408道路跡検出状況
(北東より)



2 SX1408道路跡C・D期完
掘状況 (北東より)



3 SX1408道路跡全掘状況
(北東より)

SX1407東西道路跡



1 SX1408 道路跡全掘状況
(東より)



2 SD1371 北側溝断面
(東より)



3 SD1370 南側溝断面
(東より)

SX1407 東西道路跡



1 SB1393 建物跡 (南東上り)



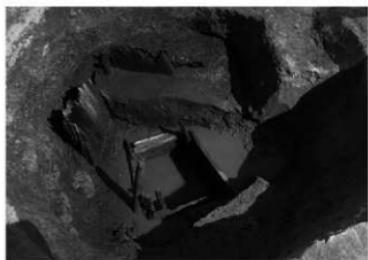
3 SB1395 穗穴住居跡検出状況 (東上り)



2 SB1393 建物跡 P1 半裁状況 (西上り)



4 SB1395 穴住居跡完掘状況 (南上り)



1 SE1375・1376井戸跡（西より）



2 SE1375井戸跡（西より）



3 SE1376井戸跡井戸側



4 SE1387井戸跡完掘状況



5 SE1387井戸跡土台



6 SE1387井戸跡 竹製品（編物）出土状況

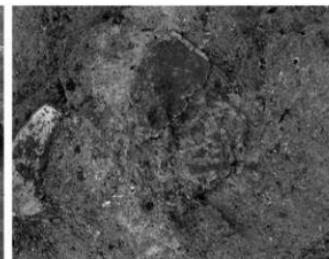
井 戸 跡



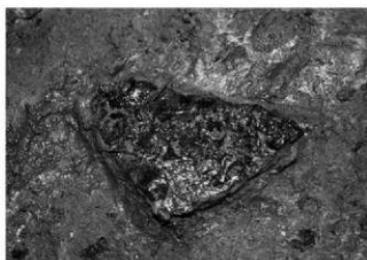
1 完掘状況（西より）



2 土層断面（西より）



3 9号漆紙文書出土状況



4 13号漆紙文書出土状況



5 11号漆紙文書出土状況

SK1372土壤



1 SX1380 完掘状況
(西より)



2 SX1380 土層断面
(西より)



3 SK1388 土壌完掘状況
(北西より)



SX1402河川跡出土土器



1



2



3



4



5



6

V層出土土器



1



2



3



4

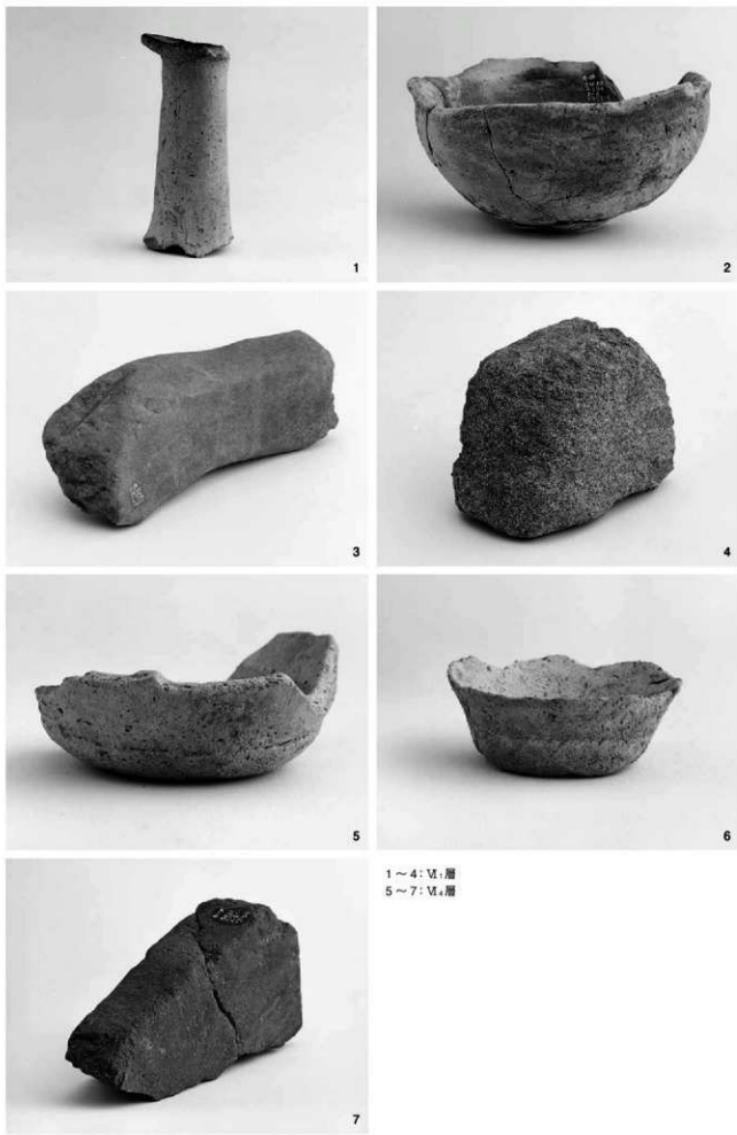


5



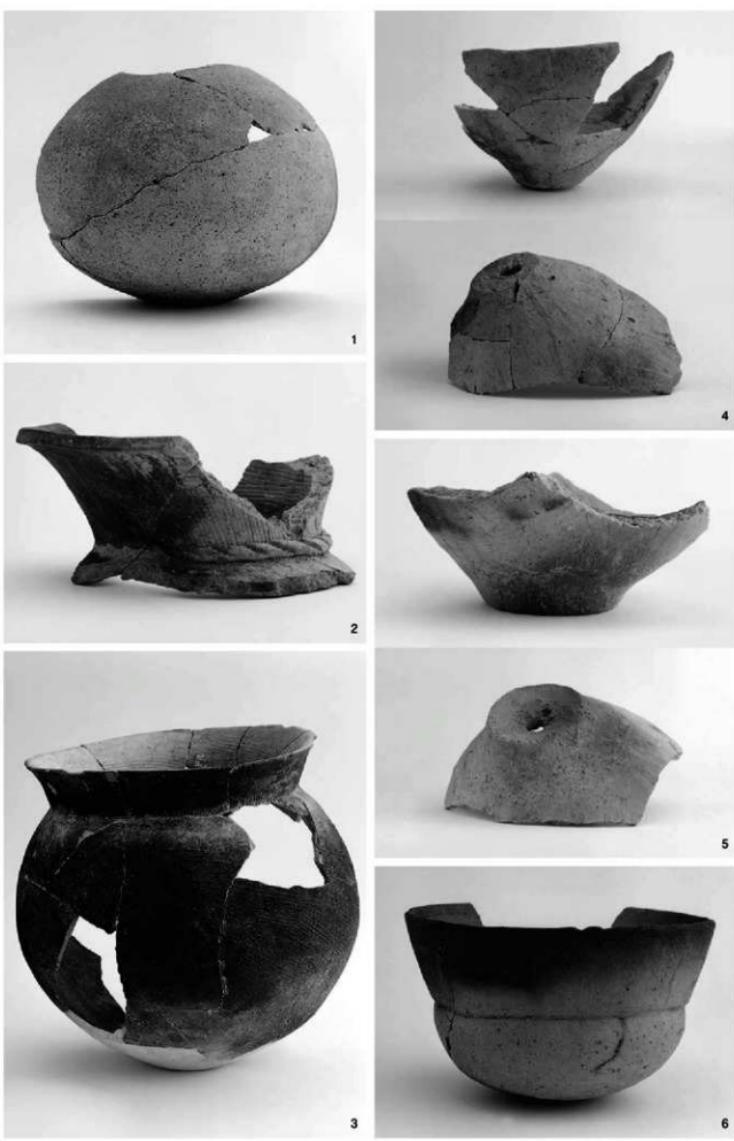
6

VII2層、SI1400・1401竪穴住居跡出土遺物

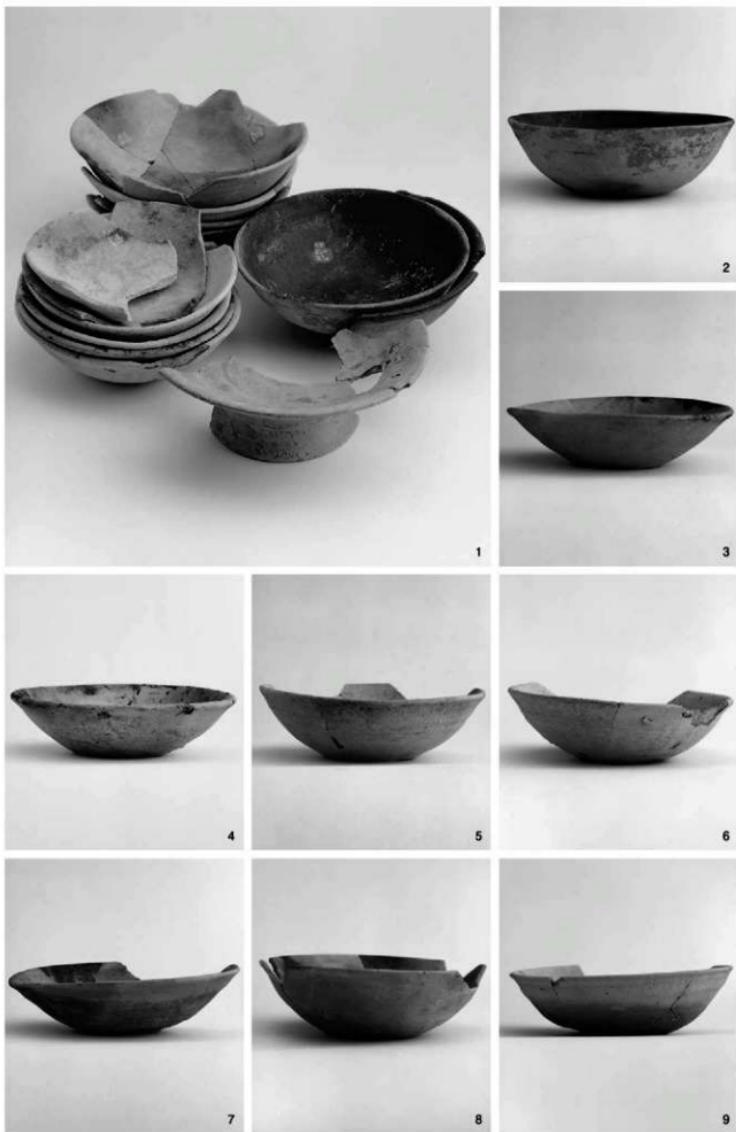


1～4: VI₁層
5～7: VI₄層

VI₁層・VI₄層出土遺物



SI1406 壁穴住居跡、SX1405 出土土器



SE1376 井戸跡出土土器 (1)



1



2



3

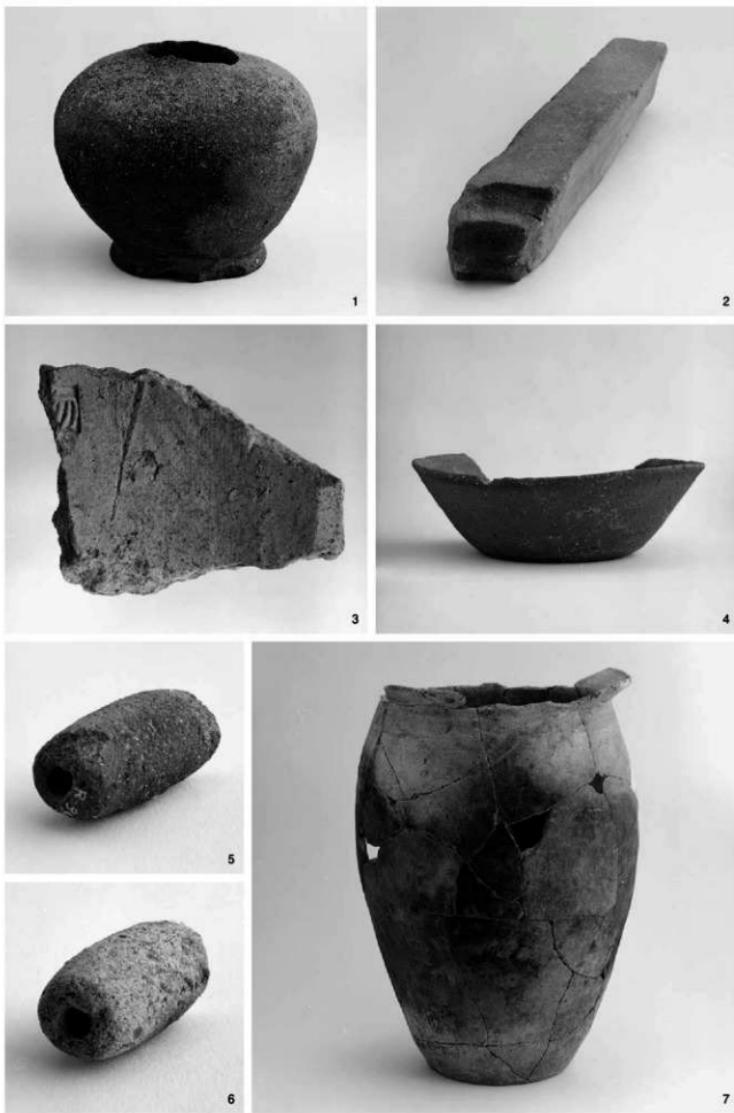


4



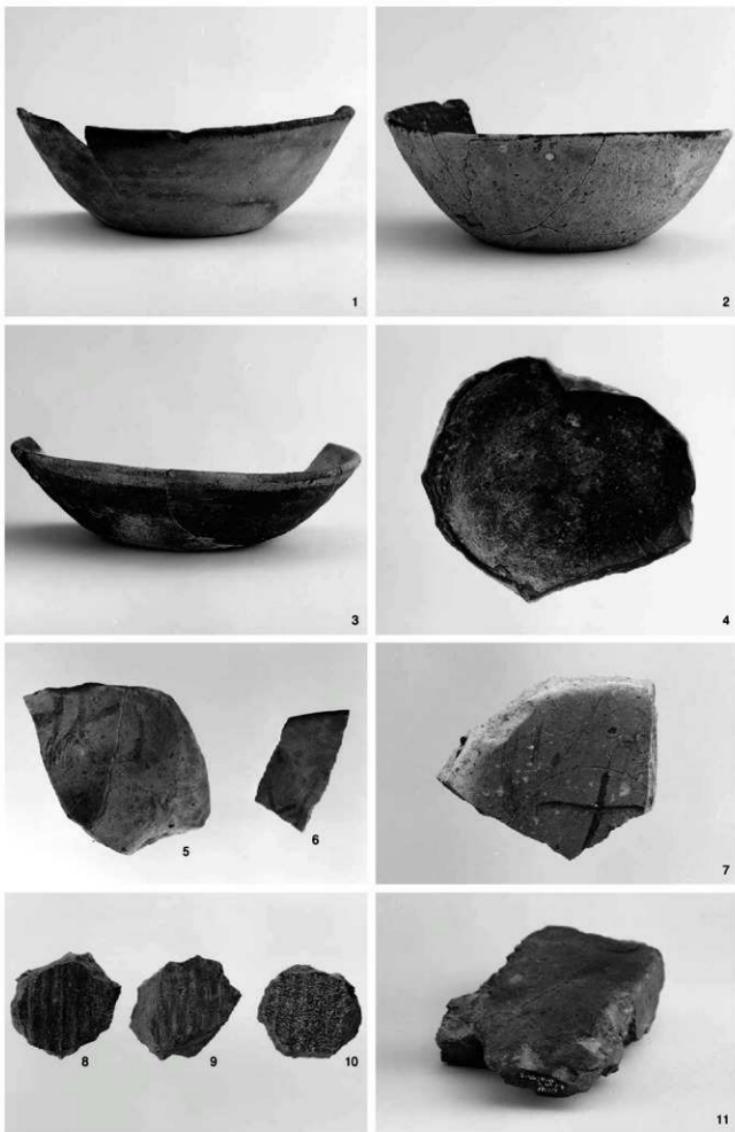
5

SE1376 井戸跡出土遺物 (2)

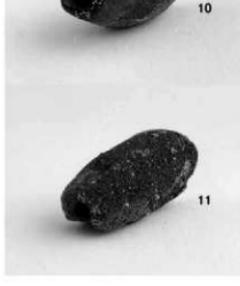
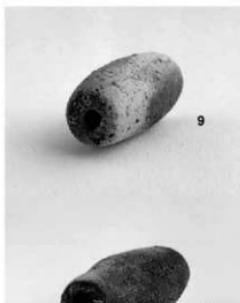
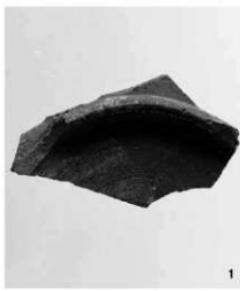


1: SE1375、2～3: SE1387、4: SK1382、5: SK1383、6: SK1398、7: SK1380

SE1387井戸跡、土壤出土遺物



SK1372土壤出土遺物



1 ~ 3 : SD1370
4 ~ 5 : SD1371
6 ~ 7 : SD1379
8 : SD1369
9 ~ 11 : SB1394
12 : II層

を用いたのが第一〇号(第7図)・第一一号(第8図)・第一三号(第9図)である。墨痕が非常に薄いものはデジタル写真の場合、墨痕が鮮明ではなかつたため、従来通りの「撮影法A」を用いた。

【撮影法B】は専用の赤外線デジタルカメラではなく、一般に市販されているコンパクトデジタルカメラ(Canon 社製 IXY DIGITAL)を用いている。市販のコンパクトデジタルカメラを使用した赤外線写

真の撮影については鷲野谷秀夫氏による報告がある(『デジタルカメラによる赤外線撮影』[筑波大学技術報告]二八、二〇〇八年、レボジトリ版)。鷲野谷報告は赤外線フィルタ(可視光線吸収フィルタ)を用いた撮影法を紹介・検討している。この報告では通常の可視光線の影響を受ける環境下での赤外線写真撮影法を紹介しているが、漆紙文

書の場合は被写体が小さいため、可視光線を遮断した暗室での撮影が可能であることから、赤外線フィルターを用いて撮影する手法を実験的に行つた。一般にデジタルカメラのCCDは赤外線・紫外線といつ不可視光領域の波長も認識することから正常な黒が表現できなかったことによると思われる、CCDが赤外線画像を認識し撮影が可能であつた。なおコンパクトデジタルカメラは通常はオートフォーカスであるため、暗室で焦点を合わせるのが困難であったため、照明の照度を落として焦点を合わせ、その後に照明を消して撮影を行つた。

文化財写真に関わってデジタル写真的問題は「埋文写真研究」(埋蔵文化財写真技術研究会)の紙面で数度に渡り論じられている。特に当会デジタル写真部会が「[デジタル文化財写真]の模索」(埋文写真研究会)

究「一八、二〇〇七年)においてデジタル文化財写真的指針の草案として第一次の一案を掲げた。すなわち、「3、デジタル画像データに信頼性を損なうような改変を行わない。また、改変をおこなうことが困難な方法を講ずる」とする。資料としてデジタル画像を持つ諸問題は認めるところであるが、今回はより鮮明な画像を資料として提示するという意図のもとにデジタル処理を施した画像の掲載を行つたものであり、ゆえにデジタル写真的撮影法、処理法、利用法を明示した。

なお、保存用として別に赤外線カメラのモニタ画像と可視光線写真を六×七版モノクロネガフィルムで撮影を行つてあることを付記する。

に関する文書と推測できる。本文書の特徴として「戸頭」と戸籍顎頭者を明記している点戸主(戸頭+戸口の表記)が挙げられるが、難翁等の力役の徵發が国府にとどめられた計帳を利用しておこなわれることと(註16)関連して理解することができよう。

第一四号漆紙文書
破片九点からなる。墨痕は確認できない。

第一五号漆紙文書(第10図参照)

本体(約7×4cm)と複数の破片からなる。残存状況は非常に悪い。

墨痕は赤外線カメラを用い本体と破片二点で確認した。数行にわたり文字があることは確認できるものの、判読は困難である。全体として何らかの文書であった可能性が高いが、内容は不明である。

註 1 茂公草「古書生に関する基礎的研究」(笛崎晴生先生還暦記念会編)日本律令制論集下、吉川弘文館、一九九三年。

2 宮城県多賀城跡調査研究所「宮城県多賀城跡調査研究資料」

3 岩手県水沢市教育委員会「駒沢城跡昭和56年度実地調査報告書」(一九八二年)。

4 平川市「ホイド清水出土の木簡」秋田県教育委員会・払田橋跡調査事務所・払田橋跡、第四十九・一二三・五四五・五四六(現調査委員会)払田橋跡調査事務所年報

5 一九八三年・一九八四年)。

6 岩手県水沢市教育委員会「駒沢城跡昭和61年度実地調査報告書」(一九八七年)。

7 秋田市教育委員会「駒沢城跡調査事務所・秋田城、政庁跡」(一〇〇二年)。

8 多賀城市教育委員会「市川橋跡、第四・三五・三七・三八(調査報告書)」多賀城市文化財調査報告書第七回集(一〇〇四年)。なお、本木簡は報告当初は○一形式(冊型)として報告さされているが、「青函鉄史」「質問編 古代2 出土文字資料」(青森県史編さん古代部会編、一〇〇八年)では、左側の折損から○八一形式(折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの)と分類する。

9 残存部の状況から原型が○一形式であった可能性は高いものの、麻糸段階の加工の有無の問題等を考慮し、現状形態を分類するという意味でも○八一形式を採用した。

10 註(1)前掲「報告書」S3〇六一河川跡は出土蔚が九世紀初頭から中葉頃といふ年代がもたらしている。

11 12 脚注手帳文化振興事業団理文化財セントー「西川日(運向)II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団理文化財調査報告書第四六集(二〇〇五年)。

13 14 多賀城市教育委員会「市川橋跡、城南上地区整理事業に係る発掘調査報告書」(多賀城市文化財調査報告書第七〇集(二〇〇三年))。

15 山形市教育委員会「馬上台遺跡発掘調査報告書」(一九九五年)。

16 波部温泉正「校刊辭典」芸文印書館、一九七三年(中華民国六二年再版)。

17 「日本国語大辞典」(ことう「言頭」項(小字解)、九七二一年)。

18 19 会員登録(二〇〇八年)を参照した。

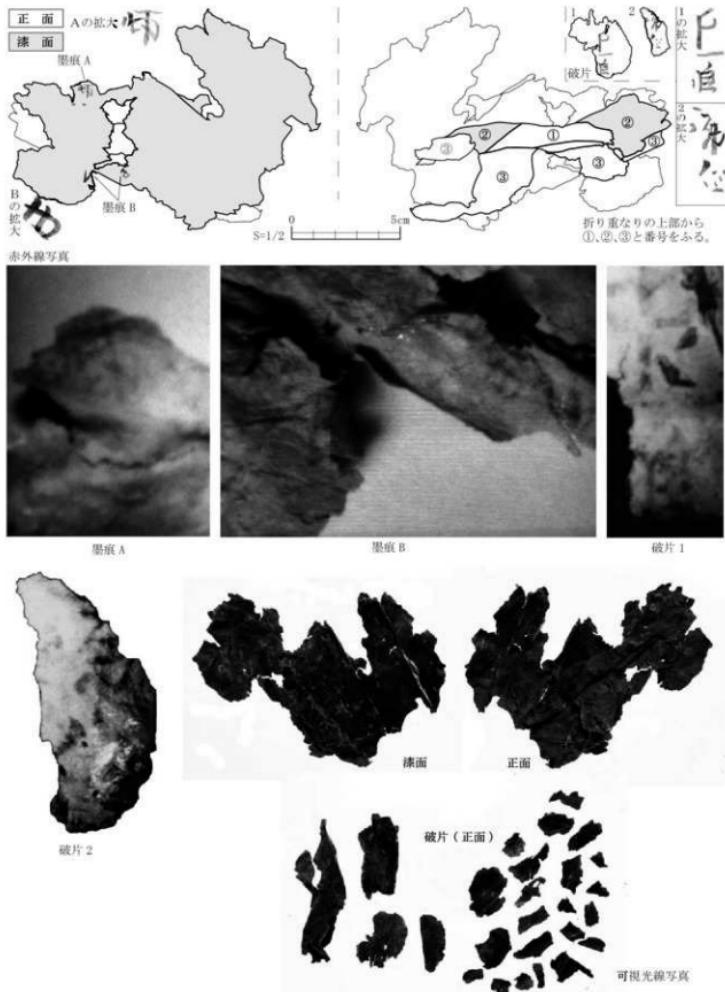
20 奈良国立文化財研究所「平城京発掘調査出土木簡釋報(三十)」二条大路木簡路溝状遺構(北出土)。(同概報(四)の訂正として発表。左京)三条坊五坪二条大路溝状遺構(北出土)。

21 講談社叢書次大漢と辞典(大修館書店、一九五九年)。

22 吉田孝「雜述制の展開過程」(法律國家と古代の社会)岩波書店、一九八三年。

(遺記)

本報告で使用した赤外線写真は、一般的に用いられている赤外線カメラのモニタ写真による撮影を撮影する手法(以下、「撮影法A」とする。なお六×七版モノクロネガフィルムによる撮影を本分類の①とし、デジタル撮影を②とする)と、デジタルカメラで直接に赤外線写真を撮影する手法(以下、「撮影法B」と呼ぶ)の二つを用い、両者とも墨痕が明瞭に見えるようにデジタル画像処理を施し(Adobe社 Photoshop CSでの「自動レベル補正」コマンドの実行、墨痕の写真実測を行ったものと同じ写真を掲載した)。「撮影法A(1)」を用いたのが第九号(第4~6図)、「撮影法A(2)」を用いたのが第一五号(第10図)であり、「撮影法B」



第10図 第15号漆紙文書実測図 赤外線写真(部分拡大) 可視光線写真

〔史料 一二〕 西部遺跡出土漆紙文書（漆面積文のみ掲載）（註13）

□ 正丁 佐伯郷戸
伯ア 正丁 同郷戸主
公 正丁 同郷戸主
坂井郷戸主同甲吉□

西部遺跡出土の漆紙文書は、兵士などの徵發に關わる帳簿であろうと推定されるが、その記載様式は、上段に「佐伯部」などの歴名（ウジ名のみ）を記載し、下段に「年齢区分+本貫地 郷名+戸主および戸主名」となっている。上段の人物が戸主であれば、「戸主」とのみ記載、戸主でなく戸口の場合は戸主名を記載している。

本文書も、このような人名が列挙された帳簿とも考えられるが、一行目と二行目の文字の大きさ・字間が異なることから、二行目以降は一行目の人名に関連する何らかの案件についての文書であった可能性の方が多い。二行目は、第一字は右払いの一画のみ確認でき、第二字は「夜」、第三字は門構えの文字である。詳しい内容は不明であるが、「夜」に関しては律令官人の出勤状況を把握する制度である上日・上夜の制度との関わりが推測される。

〔史料 一三〕 平城京一条大路木簡（註14）

志拾肆 □天平二年中等 上日貳伯
○伯陸 天平三年中 夜貳伯志拾壹 夜貳伯志拾壹 天平□

以上の例は、上日・上夜に關して、日数を記載したもので、おそらく考課・選叙に關わるものと推測されるが、その記載法は「[上日(登・夜)+数字]」であり、本文書の記載法はこれとは異なる。しかし第三字が推定の通り「閑」であれば、以下のようない推測ができる。「閑」には一般的に「里の門道すちの門」という意味があり、「閑閑」「閑巷」でもらざと「民間」という意味をもつ（註15）。また「令集解」賦役令孝子条古記に「古記云、門閑、謂家并当里路門也」とあることより、里（五十戸）一里の里ではなく、一般的な集落を意味するかの門を意味する。本文書の性格はあるが、一つには「閑閑」「閑巷」という語を想定し、「夜、巷・村里に關わって太部田主が關わる文書」とすること、もう一つには「閑」の「門」という意味を重視し、「夜、門に關わって太部田主が關係する文書」という性格を想定することである。後者とすれば、衛律令の諸規定にも見られるように諸門の守衛は昼夜問わず行われるものであるから、この門の守衛を主たる任務とする力役徵發

〔史料 一二〕 多賀城第一七号漆紙文書

・ □里小野田一段

山形市馬上台遺跡^(註10)で類似する字形の墨書きを持つ墨書き土器が出土

しているが、文字か記号かは不明である。「康熙字典」^(註11)にも同様の字形を持つ文字が採録され、「川篇 音窓。孔穴也」と説明する。

すなわち「川窟」によると、音は「ソウ」で穴、孔と同義であるとする。

仮に意味である「孔」をとり、「あなぬ」という人名の可能性も浮上するが、本報告では、類例が確認できないこと、及び人名の一般性と

いう視点から「田」の誤記であると考える。

戸頭は戸主と同義の用語であると思われる^(註12)。「令集解」戸令造計帳条では、古記が「手实、謂戸主所。造計帳也」とするところを、令根が謂、手实者戸頭所。造之帳耳」とし、「令義解」も「謂、手实者、戸頭所。造之帳」と令根説を繼承している。明法家の諸説では戸頭と

「史料 八」 優婆塞貢進解〔大日本古文書二 三四七頁〕
柿本臣大足(年廿一) 大義德國添上郡大岡郷戸頭柿本臣佐賀志之男
(中略)
天平四年三月廿五日僧智首

「史料 九」 優婆塞貢進解〔大日本古文書二 三一四頁〕
柿本臣大足(年廿一) 大義德國添上郡大岡郷戸頭柿本臣佐賀志之男
(中略)
天平十四年十一月十五日
師主興福寺僧仁戒

「史料 一〇」 優婆塞貢進解〔大日本古文書二 三一五頁〕
小治田朝臣□ 左京六条一坊戸主大初位下酒田朝臣三男
(中略)
天平十四年十一月十五日

柿本臣大足(年廿一) 大義德國添上郡大岡郷戸頭柿本臣佐賀志之男
(中略)
天平十四年十一月十五日

戸頭などから作成される藉帳の歴名記載では、たとえば天平十一年五月二十九日太政官符に引用される天長五年三月五日太政官符所引民部省解には、「或一嫗戸頭、十男寄口、尋彼貢属、所生不明、或戸主耆老群幼新附、以レ父言レ子」とあり、ここでも戸頭と戸主が同義であることを前提に対句的な表現が用いられている。

戸籍などから作成される藉帳の歴名記載では、たとえば天平十一年五月二十九日太政官符に引用される天長五年三月五日太政官符所引民部省解には、「或一嫗戸頭、十男寄口、尋彼貢属、所生不明、或戸主耆老群幼新附、以レ父言レ子」とあり、ここでも戸頭と戸主が同義であることを前提に対句的な表現が用いられている。

また新潟県西部遺跡から本文書の記載と類似する次のような漆紙文書が出土している。

などと、その人物の所属する戸の戸主（戸頭）も共に列記することが多い。本文書一行目の記載は戸主と戸口の記載の順がこれらとは逆であるが、同種のものと思われる。戸口を抜き書きし戸主（戸頭）を明記する記載は正倉院文書中の「優婆塞貢進解」等に多く見られる。以下、類例を列記する。

一、釈文

部
田主

戸頭丈

夜

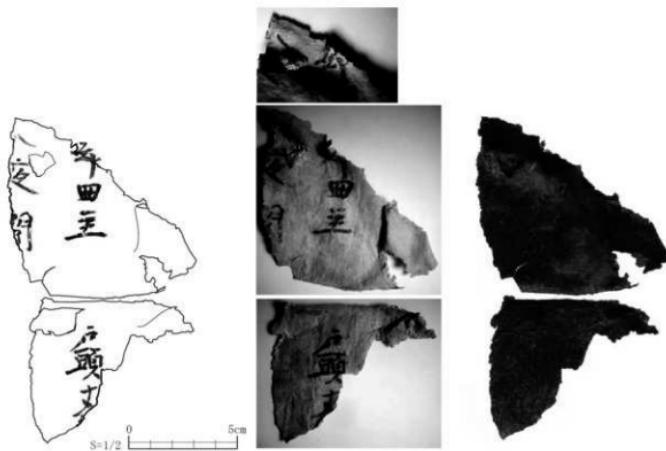
ほぼ半円形の左半分が残る。本来四つ折りにされた状態で廢棄されたと考えられ、漆桶の推定径は約17cmである。漆の付着が良く、残存状況は良好である。内眼でも墨痕を確認できるが、赤外線カメラの方がより鮮明である。文字は三行、約100文字を確認できる。

二、形状

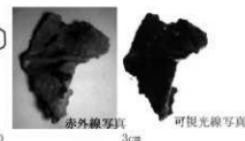
一行目には、上段・下段に人名を記す。下段に「戸頭丈□」とあることから、上段の人名は、下段の人物の戸口であると考えられる。

「田」は「田」か「曲」の誤記。特に人名記載であることから、人名に用いられるより一般的な文字として「田」の誤記であると推定される。古代における「田主」という人名は『万葉集』巻二、一二六一~二九番歌の「大伴宿田主」、「続日本紀」養老五(七二二)年正月庚午条・庚戌条の「山口忌守田主」をはじめとして、種々の文献史料に数多く存在する。また「田主」とへラ書き・墨書のある土器が東北地方各地から出土している(岩手県北上市西川目遺跡、宮城県多賀城市市川橋遺跡、山形県寒河江市三条遺跡等^{註9)})。なお「曲主」という人名は管見の限り確認できることから、「曲」の誤記の可能性は低い。

最後に「田」という字形の文字が存在することを紹介する。「田」は



第9図 第13号漆紙文書展開実測図・赤外線写真・可視光線写真



第7図 第10号漆紙文書

第一〇号漆紙文書(第7図参照)

破片五点からなり、漆の付着は厚い。

破片一点で墨痕が認められるが、判読できぬ。肉眼では墨痕は確認できます、赤外線カメラで確認した。

第一一号漆紙文書(第8図参照)

篆文

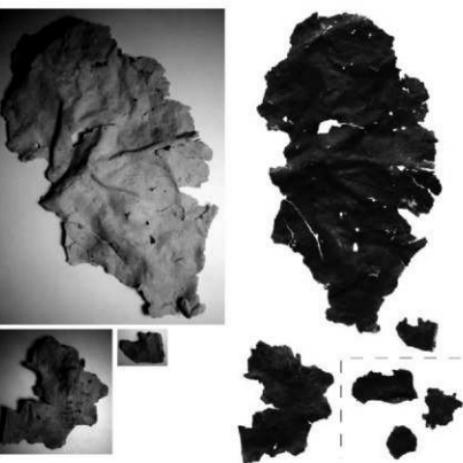
「貞觀三年」

本文書は本体(約 15×8 cm)と五点の破片からなる。墨の残りは良好だが、墨痕は赤外線カメラでのみ確認できる。破片一点に「貞觀三年」とあり、「貞」は、字画の下部のみが見えており、「觀三年」は赤外線カメラで明瞭に認められる。貞觀三(八六一)年は第九号文書の天安年間(八五七年～八五八年)と接近する時期のものであり、第九号文書と同様に、出土遺構の年代とはほぼ一致する。

破片数点で墨痕を確認しているが、文字としては判読できない。

第一二号漆紙文書

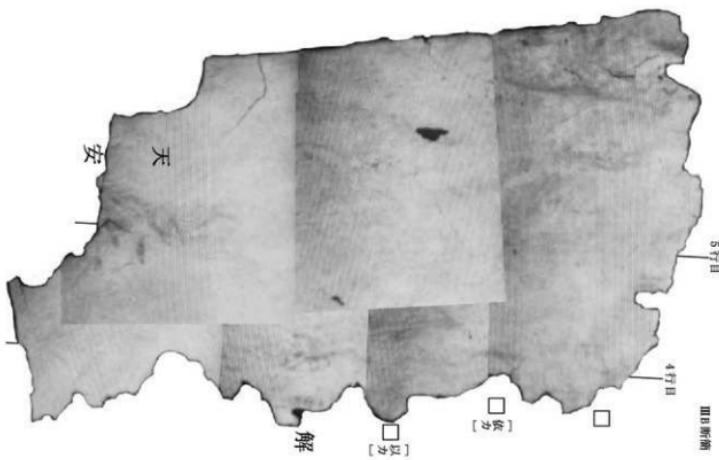
破片数点からなる。墨痕は確認できない。

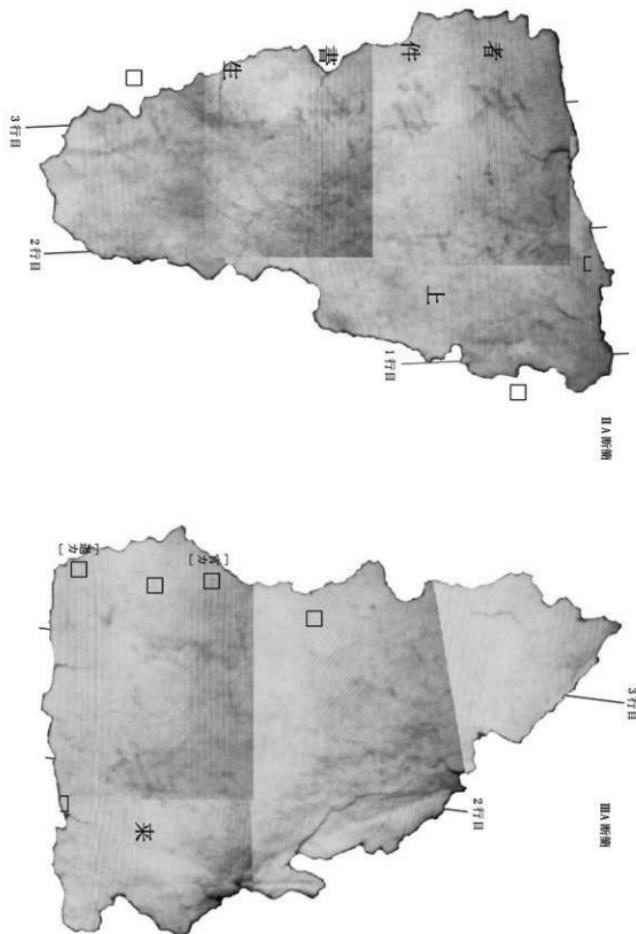


第8図 第11号漆紙文書実測図・赤外線写真・可視光線写真



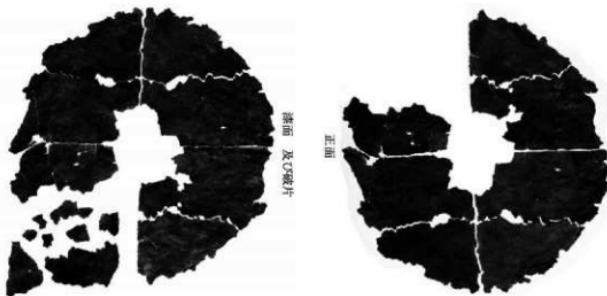
第6図 第9号漆紙文書 断簡別赤外線写真2





第5図 第9号漆紙文書 断簡別赤外線写真1

可視光網写真



第4図 第9号漆紙文書赤外線写真・可視光網写真



赤外線写真

〔史料三〕 胆沢城跡漆紙文書^(注3)

〔員□〕如件以解

延暦廿一年六月廿九日書生宗^{〔注4〕}

王造團大義志太^{〔注5〕}

〔史料四〕 托田橋跡ホイド清水出土第一号木簡^(注6)

×□件請取聞四月廿六日書生仙□氏監

(223) × 24 × 5mm 019形式

〔史料五〕 胆沢城跡出土木簡^(注5)

勸書生吉弥侯豐本

(131) × 19 × 8mm 019形式



233 × (27) × 4mm 081形式

これらは、いずれも九世紀初頭の征夷事業が活発な時期のもので、

陸奥國や出羽國では書生が食料請求関連の文書などを作成していたことがわかる。また、「史料六・七」でも明らかのように、丈部姓の書生の例が目立っている。特に、「史料七」市川橋遺跡第一一六号木簡は年紀を欠くものの、出土遺構の年代が本漆紙文書とほぼ同時期のものである^(注8)。

本漆紙文書は「解」の上部が判読不能なため、書留文言が正確に特定できないが、「史料一～七」の事例から考えると、中央への上申文書の案文ではなく、国内の役所間において取り交わされた文書であろうと推定される。なお、本文中の「件書生」と曰下にみえる「書生丈マ」とが同一人物であるか否かは不明である。

(204) × 23 × 4.5mm 051形式

〔史料七〕 市川橋遺跡第一一六号木簡^(注7)

・書生丈部廣道□

□□□□□□□右 右□□□



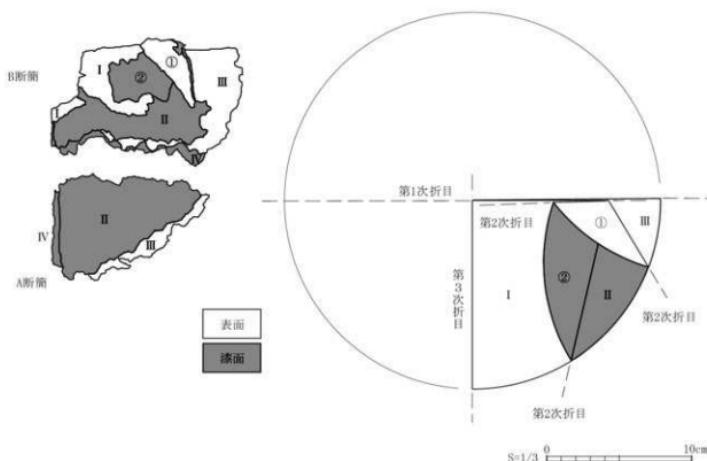
第3図 第9号漆紙文書墨痕実測図

〔史料二〕 多賀城第五号漆紙文書(注2)

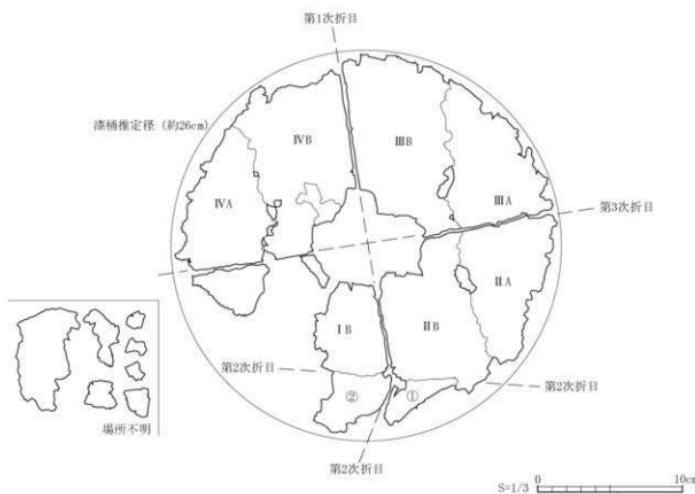
- 〔合三斗〕 謹請
- 〔廿一日盡廿九日合九箇日糧〕
- 〔廿一日盡廿九日合九箇日糧〕
- 〔書生二人 膳部〕
- 〔天應元年五月十八日書生〕
- 〔厨〕

〔史料二〕 多賀城第六号漆紙文書(正面積文のみ掲載)

- 〔合十口口糧請〕
- 〔應元年五月九日口口口〕
- 〔十三日〕
- 〔書生生部益人〕
- 〔據安倍朝臣〕
- 〔真口〕



第1図 第9号漆紙文書出土状況実測図・模式図



第2図 第9号漆紙文書展開実測図

附章二 山王遺跡第六六次調査出土の漆紙文書

平川南
武井紀子
鈴木琢郎

本章では、第六六次調査のSK一三七二土壙より出土した漆紙文書について述べる。

2.2×2.5 cmである。一行目は、円の縁部分に残画が數ヵ所残るのみである。二行目、三行目は墨痕が薄いために部分的にしか判読できないが、「件書生」などの文言がみえる。四行目には「解の文字がみえ、それに続く墨痕は確認できない。五行目には「天安」(月廿六)と日付の記載がみられ、日下には「書生丈マ」と見える。「解に続く文字がないこと、及び日付記載があり日下に副署記載と思われる文言があることから、本文書は解であると考えられる。

なお五行目の年号「天安」(八五七一八五八)は、出土遺構の年代を九世紀中葉から第三四半期とする考古学的知見とも一致する。

第九号漆紙文書 (第1~6図参照)

一、祝文



三、内容

全体的に文字の残りが良好でないため、具体的な内容を判断することは難しいが、残存部分から、本文書の形式が解であることに加え、その内容が書生に関わるものであると考えられる。

地方官における書生には国書生と郡書生があり、陸奥国では鎮守府の書生(後掲「史料五」)の存在が推定されているが、本文書の書生は国書生であろう。国書生は八十九世紀の早い段階からその活躍が見られる。彼らは白丁であり、籍帳勘造やそのほかの國務全般に携わる役割を果たしている。森公章氏は「書生は國府に常勤する存在であり、彼らなしには日々の公務に支障が生じる程の重要な役割があった」とする。大国では五十人ほどの書生が活動していた。

陸奥・出羽両国に関しては、出土文字資料のなかに比較的多くの書生に関する史料がある。以下、列記する。

二、形狀と書式

出土時の折りたたまれた状態(四つ折り・扇型)を開くと、中心部を欠くほぼ円形となる。残存部分の径は約26 cm。全体的に漆の付着が非常に薄いため、残存状況は良好とはいえない。墨痕は肉眼では確認できず、赤外線カメラで確認できる状態である。文字は、円の右半分に五行認められるが、漆面からは確認できない。行幅は文字の心々で約

報告書抄録

多賀城市文化財調査報告書第100集

山王遺跡

- 第66・68次発掘調査報告書 -

平成22年3月31日発行

編集 多賀城市教育委員会

発行 多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022)368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町210

電話 (022)288-6123

